さて斯うなれば箭でも鐵砲でも持ッて來いといふ勢なり、

『さァ先生、談話ァ後だ、兎も角も喰ッて下せエ、わッしやァ酒だ、しかし一盃どうですい、え、お好きでもねエが、こンな時こそ何とか言ひましたッけ、むゝさうよ、憂を拂ふ玉帚だ、乙な事を知ッてるでせう、ハ、、、なゝ何故、なぜ先生、食ッて下さらねエンだ、無理に引ッ張ッて來たのが、お氣にでも觸ッたンですか』

『いや、どうして、決して、なか〳〵、さういふ理由では無いが、しかし、實に慚愧の至極だ、いかに鐵面皮でも、顏を上げて居れない』

『先生、目を開いて見て下せエ、こゝに居るなァ熊の野郎ですぜ顏を上げるの下げるのッて、馬鹿々々しい、そンな理窟も絲瓜もねエぢやありませンか』

『さ、そこだよ、さう言はれるほど猶更心に恥ぢて、ます〳〵堪へられない、寧ろ苦しい』

『ハ、、、先生、例の一件を氣に仕て、この熊に面目ねエとかなんとかつまらねエ、事を考へて居なさるンだな、ぢやァ、いッそ此方から手ッ取早く叩き割ッて、無遠慮に出かけませうよ、ハ、、、時に先生、あの廂髪ァ其後、どう仕ましたい、實ァお手紙を持ッて來た屑屋の影から三輪新町の木賃宿まで、内々そッと往ッて見たンですぜ、ところが、驚きましたね、あンまりだァ先生、いくらなンだッて、まさかと思ッた例の廂髪が、ぬッと出た姿を一目、や、流石の熊も開いた口が塞がらずさ、其まゝ飛ンで歸ッて、今でこそ話しますが先生、いけねエ、もう無效だ、あれぢやァ仕樣も模樣もねエと、匙を投げて仕舞ッたンですよ、しかし先生が先生で相手の女が女だから、どうせ早いか遲いか、お目の覺める時があるだらうと思ッてね、いつも蔭ながら嗅ァと、お噂を仕て居ましたのさ、だが今日の今夜、この夜深に先生、あンな危ねエ河岸ッ端の闇で、全體、何を考へ込ンで居なすッたンですい

よく出逢ッたこッたよ、第一また神田の本屋さンが附いてる以上、どンな事になッてもさ、食ッたり著たりするぐれエの事ア、と思ッた先生が現在その襤褸を纏ッて、加之も大變お瘦せなすッたぜ、案の定、あの阿魔ッちよ女、とンでもねエ不義理のありッたけ仕盡してあけくの果に先生を斯ういふ酷い目に逢はしやアがッたンですな』

星影先生、みる〳〵兩眼に涙を含ンで無念の齒を嚙占めしが、果は堪へず其まゝ男泣の聲をあげて打伏しぬ、

はや夜の一時を過ぎしころ、三度借越の齒代もろとも俥は帳場へ返して、大願成就の仲し餅を荷ぎ嗅へ不意の土産を携へながら、聊か酒氣を帶びて歸り來りし熊公、見れば流石に今夜一年の最終なり、大晦日も元日も同じ浮世に用なき筈なれど、さて何とやら落著いて寢られぬものか、いつにない事、長屋の兩側より障子越に豆ランプの灯影、ぽッと照らしぬ、

『こいつァ景氣が宜いわい、どうか年中かう仕てエもンだ、おい俳優さン、定めの女の力から春著でも仕送ッて來たらうな、ハヽヽヽヽ、おい石作さン、まだ起きてるかね』

色狂者は例の一件以來、うッかり物もえ言はねど、呼ばれし千三屋の石作、寢ながら表障子を開けて熊公の體を見るや否、むくりと起直りぬ、

『や、熊さン、大變な勢ひだね、ぷンと酒香がするぜ、こりやァ驚いた、加之も荷いでるなア餅だね、二枚だな、おまけに片手も何か、提げてるぢやアないか、全體どうしたンだい』

『なさけねエなア、年の暮に伸し餅二枚を荷いで歸りやア、急に起直ッて全體どうしたと、いふ奴も奴だが、また不審を打たれる乃公も乃公だア、しかし石作さン、一蓮托生お互ひ

のこッたよ、もし手許に無きやァ明日の朝、ちよいと來なせエ、せめて正月の眞似事でもしようぜ、ハヽヽヽ』

『ありがたい、が、七年目、どッこい、待ッた、辛抱は這處だ、うか〳〵餅は食はれないぞ』

『何、うか〳〵食はれねエ、どッこい七年目だァ、何のこッた』

『實ァ熊さン、思召は千萬ありがたいがね、この石作、考へて見ると餅のない年の暮が七年も續いたよ、ところが人間は總て七年を浮沈の境界といふ勘定で、ことしに限ッて猶更木綿らしく餅を食ッちやァ折角、出直す來年の運に差響くからね、御芳情だけ頂戴して置かう』

『ハヽヽヽこゝ七年や十年で芽の吹き出しさうな面ぢやァねエよ、諦めて食ッた方が宜からうぜ、もし出直して來る運がありやァ、一旦この世を死ンで仕舞ッて生まれかはッた二度目のこッた』

『いや、お禮だけ申上げて置かう』

『嫌なら止しやァがれ、わざ〳〵誰が頼ンで食ッて貰う奴があるけエ、この千三野郎め』

かくと聞くや否、ごそ〳〵と這出せし朝鮮髯、障子を開けて首を突出しぬ、

『熊さン〳〵、こゝに一人、心魂に徹して有難く食ふ奴が居るよ、どうか千三屋の分と二人前を引受けたいもンだ、拙者元來その方の職業だが、斯る場合に運氣の事は言はないよ、ハヽヽヽ』

鑛夫の西川は負惜しみに面は出さねど、こゝにも一人ありとの事、障子を漏れて聞ゆる咳拂ひの聲高し、

『えへン』

お虎婆は例の因業、どうせ自己は交際外と高を括ッての悪まれ口、

『やれ〳〵、伸し餅二枚で長屋中の大騒動だ、もし軍鶏の一羽も舞込ンで來りやァ氣絶するだらう』

女房お菊は待兼ねて豆ランプを手に持ちながら立出でぬ、

『良人さン、今お歸りか、氣をお付けなさい脚下が危いよ』

『まァ妾、こンな嬉しい事はないよ、せめて一枚、それもね、どうかと思ッて居た伸し餅が二枚で、また別に妾へ、平常の日でもないにさ、もう〳〵これで死ンでも宜いよ、かういふお茶で甘納豆を喫べたのは良人さンと夫婦になッた翌日、そら、あの、大雪の降ッた朝ね、あの時ッきりだもの、きッと良人さン、この元日も雪になるよ』

『なさけねェ事をいふない、乃公だッて米の飯に不足が無きやァ、朝夕の茶うけに喰してやらァ』

『いゝえさ、妾はね、そンな贅澤は入らないよ、たゞ良人さンさへ機嫌よく働いてくれて、願望は年に一度か二度で結構、それも出來る時でさ、實は今日だッて、この押詰ッた年の暮の寒い中を、わざ〳〵稼ぎに出したくは無かッたよ、あとで後悔したくらゐだよ』

『わかッてらい、うるせェなァ』

『しかしね良人さン、あンなに吐鳴散して這入ッて來たから、まさか捨てゝも置けまいさ、一枚だけは覘はれてるよ、無いも同じこッたよ』

『宜いぢやァねェか、夫婦で一枚ありやァ正月の眞似事ァ濟むさ、口で何を吐したッて千

三の野郎にも分けてやる心算だ、八卦屋と鑛糞と色狂者と、お虎婆も數に入れてよ、心持よく都合五切に切ッて配らうぜ』

『眞實に良人さンは、人が善いよ』

『ハ、、、、うぬが噂ァに譽められりやァ澤山だ、や、時に今夜、出喰したぜ、厩橋の河岸ッ端で、先生によ』

『おや、あの先生に』

『あれこそ人が善いンだな、つまり斯うだ、いはねェ事か案の定、あの阿魔ッちよに仕て遣られてね、千住の先の裏長屋へ一時、ちよいと夫婦氣取で九尺二間を持ッたさうだが、た だ眼前の取るものを取ッて遁げるといふ女なら、まだしも、畜生ッ、太エ女だぜ、いよ〳〵詰ッた結句の果に先生が、實ァ田舍に一反の田地があると口を辷ッた、すると彼女、忽地その手へ喰ひ付いて、たどァ置かねェ、わざ〳〵先生を巧く田舍へ追ひ遣ッてさ、その田地を百三十圓とかに賣らせてよ、持ッて歸ッた二日目の夜、つい近處へ買物に出たまゝ行方しれずとなりにけりだ、えゝおい、どうだい、無論、身體ばかりぢやねェ、金もろともだ、可哀さうに先生の手許へ殘ッたなァ十二圓餘と聞いて乃公ァ、腹ン中の臓腑が煮ッくり返るやうだ、ぶる〳〵顫へたぜ』

『あら、まァ、とンでもない女だねェ、しかし先生も先生だよ、じれッたい、あンまり甘過ぎるからさ、全體どこが氣に入ッたンだらう、あンな嫌な廂髪の摺れッからしがさ』

『そこが先生だよ、いくら學問があッても何でも、あの通り世ン中に疎くッて、初心だからな、無理もねェが相手の阿魔ァ底の底まで念の入ッた酷い女だぜ、乃公ァ見付次第、横ッ面の二擊三擊ぢやァ承知しねェ決心だ』

『眞實だよ、妾だッて、喰付いてやるよ、ところで先生、今、どこに、どうして居なさるの』

『どこに今、どうしてといふ、その居所は偖置いて、もはや世の中に身の置どころもねェといふ、危ねェ河岸ッ端を助けたンだ、そこで兎も角も無理に居酒屋へ連込ンで、以上の談話を聞いたンだが、幸ェ今夜ァ運に叶ッて、まだ三貫の錢が殘ッてるからな、淺草町の木賃宿まで送り屆けて來たのよ、例の麭麵宵や燒芋の蒸せェ工面に盡きて仕舞ッて、まる三日の間、飲まず食はずに茫然と歩いたさうだ、ばう〳〵と髯は生える眼は窪ンで頰骨が飛出してね、この寒中に襤褸の袷一枚の素肌よ、おッと、近火々々、袷の素肌ァ當然だなァ、嚊ァ、世間一般だ』

『ホ、、、世間一般だから妾も、不足は言ッて居ませンよ、御安心なさい』

去年の一切萬事、さらりと西の海へ放り投げて、年と共に新なる東の空より、ぬッと初日出の目出たさ、正月の松のうち翠の色も相變らず御慶を申す三日間は、いよ〳〵世間の手前、出ろに出られぬ蛇を組ンで八軒長屋の奥に閉籠る奴さへ、流石に何とやら心ばかりは春めいたり、

まして長屋中いづれも平生とは違ひ一年の人事最始、おの〳〵舊臘のうちに身分相應の神算鬼謀を廻らして、まづ三日籠城の兵糧だけは無事に貯へたれど、さて餅にまでは手も足も屆かぬといふところへ、伸し餅一枚を五切に配りし熊公、猶更心地よく朝より鼻唄まじりの口三味線、

『どうで御坐いますな、お菊さン、うまいもンだらう、これでも二十四五の昔は隨分、小意氣に乙な熊さンだッたよ、まンざらの野暮でもねェからな、ハ、、、』

『おや、お菊さン、聞いたやうな名だッけ、全體、どこの女だらう』

『ハ、、、正月早々、おい嚊ア、も聊か失禮だと心得て、ちよいと改まッて見たのさ、ハ、ハ、しかし、何だか今年ア氣が面白くッて堪らねエ、わづか一枚の餅にしろ、同じ浮世の一枝に巣を作ッて棲む長屋中へ配ッてよ、あれば飲める筈の酒も、その錢を人助けのために出して仕舞ッたと思やア、醉ッた心持より乃公ア嬉しいぜ、ねエ、おい、嚊ア、今日だけ宗旨を變へて、や、美味さうだな、甘納豆の仲間入でもしようか』

『さア〳〵、今お茶を入れるからね、御遠慮なしに手を御出しなさい』

『だが、今やッと餅を喰ッた後で、また甘納豆は少々恐れるね、胸が惡くなりやア仕めエか』

『さう良人さン、心配するなら、やはり傍で默ッて、おとなしく神妙に見物した方が宜いでせう』

『たど見物も殘念だよ、がう腹だなア、一番、うンと度胸を据ゑて、ちよッぴり食ッてやらう』

折しも長屋の入口より靴の音、いかに狼狽へても洋服の禮者が舞込む筈なし、はて不思議と思ふうち、我家の門口に立停りし一人の巡査、じろりと差覗くや否、

『おい、辻俥を曳いて出る熊吉といふのは汝だな、すぐ其儘で宜いから警察署まで來い』

女房お菊、はッと驚いて目を剝出せば、熊公も思はず顏色を變へながら、俄に膝頭を縮めて這出しぬ、

『だど旦那、いくら下司ッぽく貧乏したッて警察へ何も、この正月の二日から呼出されるやうな、そンなもンぢやア御坐いませンよ、へエ、どうか旦那その理由を』

『たゞ來れば宜いンだ、早く出い』

『だッて旦那、じやう戯談を』

『こらッ、戯談とは何だ、すぐ來い』

人の血を吸ふ鬼のやうな奴さへ自然に身も心も新なる正月、加之も目出たき一年中の人事開始といふ二日の朝、八軒長屋の名物男たる熊さンが不意に警察へ引行かれしとなれば、仲し餅の手前なくとも騒がずには居れぬ一蓮托生、わけて女房お菊は猶更狂氣の如し、何事も先登第一に狼狽へ廻る朝鮮髯、あッと驚いて飛出せしが、また忽ち駈戻ッて天地四方を拜しながら、俄に笠竹を取出し算木を置竝べつゝ、眼を閉ぢて吉凶 判斷の眞ッ最中、此奴も慌てし千三屋の石作と鑛糞の西川、顔色を變へて飛込めば、あたら神易、めちや〳〵となりぬ、

『やッ、こりやァ酷い、せゝ折角こゝまで出た卦を』

『馬鹿々々〳〵しい、そンな平凡八卦で事が濟むかね、兎も角も誰か警察へ往ッて、樣子を聞出して來るのが近道だ、それにやァ朝鮮さン、いくらか仔細らしくッて君に限るよ、さァ早く』

『眞實だ、こゝで氣を揉ンだッて仕方がないよ、早く往ッて貰ひたい、今も細君が行くと騒ぎ出すから無理に止めて來たンだ、さァ早く賴むぜ、何だね竹ッ屑や拍子木の切れッ端は後で片付けてやるよ、さァ早く』

『なるほど、こいつァ拙者の神易よりも早道らしいな』

『知れたこッた、二錢や三錢で出る卦が何になるもンか』

『や、道理だ、心得た、人も人によりけりだ、あの熊さんが警察へ、そゝそんな馬鹿な事が、案じるに及ばない、この幸運齋、一言の下に連れて歸るから』

『文句は後で聞くよ、早く出たッ』

朝鮮髯、其まゝ飛出せしかと思へば、また取ッて返して、きよろ〳〵見廻す體、

『おい〳〵何だよ、どうしたンだい』

『いや、帽子を忘れたよ、苟くも警察なンかへ出る時は威儀を正さないと人體に關はるからな』

『ちよッ、困るなア、そら、その壁に懸ッてるぢやァないか』

『おッと、これでよし、もう大丈夫だ、安心して待ッてるが宜い』

明治七八年ごろ我國へ輸入せし古色蒼然、夜な〳〵淺草へ戴いて出る黒の山高帽子を面深に被りつゝ、怪しげなる例の道行を著流し、齒の缺けたる日和下駄の音高く、ひよこ〳〵と小走りに驅行く後姿、甚だ不安心ながら、せめて彼奴の叱られ工合で本人の樣子を探らンと待受けぬ、

まして安房お菊は長屋の入口に立ちながら、今か〳〵と待受けし朝鮮髯よりも本人まづ歸り來りし姿を見るや否、おもはず驅出して半泣の聲、

『良人さンまア、良人さンどうしたンですよウ』

悄然たる熊公、差俯きし面をあげて兩眼の溜涙、ほろ〳〵と振落しぬ、

『とンでもねェ事になッたよ、先生が首を吊ッて、しゝ死ンで仕舞ッたンだ、その遺書の中に乃公の名が、あッたからさ、南無、南無阿彌陀佛、

正月三日、都下の新聞紙上いづれも三面の一段以上を埋めしは、例の星影先生が首吊一件なり、

其うちに最も愛讀者の多き一新聞の記事を轉載すれば、左の如し、

◎戀愛詩人のブランコ往生

鰕茶式部に深き恨の遺書

舊臘三十一日の夜一時前に淺草町の木賃宿へ辻車に乘りて投宿せし一人の男(年齢三十)宿帳に山口謙次郎と認し三日分の宿料を前拂にして此社會の所謂る別間と稱する二疊の一室へ入りしが越えて二日の黎明その兵兒帶を鴨居に懸けて無殘の縊死を遂げたりと以上これのみにては更に何の事もなけれど、抑も此縊死者の死因に就いては大いに憐むべきことありて今日世間の青年男女が頂門の一針ともなるべき一の懺悔文を遺せり加之も鉛筆にて二枚の改良半紙へ書流せる筆跡といひ文章といふ聊か見るに足るのみか我一社員の記臆に依れば星影といふ雅號は曾て或文學雜誌へ折々新體詩を寄せしものなりと兎も角も左に掲ぐる死者の一文に依ッて其人物の奈何と事の玆に至れる眞相を窺ひ知るべし、

我は自然の死の手に導かれて花の梢を辭するが如く逝くものにあらず、我は不自然の死の穴に誘はれて背を打たるゝが如く陷るものなり、加之も資性の頑迷にして素養の淺劣なる、いかた先哲の死に臨んで物に煩はされざる高潔の裳を捉へむとすれど、悲い哉、我は事の玆に到れるを以て悉く自己の罪のみに歸する能はず、今や最後の間一髪その刹那にも眼前に現はれ來りて我に纏ひ我を促しつゝ嘲けり笑へる一個の惡魔あるを奈何

せむ、あゝ我は我死を安からしめむがため日々夜々この惡魔を忘れむとせしが、この殘忍なる惡魔は竟に去ずして明白に我を縊れり、惡魔の姓は瀨田、名は豐子、年は二十一、歌妓娼婦の類に屬して世の所謂る醜業婦なるものにあらず、常に淸き戀の神聖を說き圓なる愛の理想を希ひ最も高尙優美なる品性を養ひ來りしといふ女學生の一人なり、我また當時は常に天空の高きを仰ぎ海底の深きを羨ンで其間の地上に於ける人事一切を唾棄せし一個の詩人なり、この幽玄なる詩人と、かの優美なる淑女と、互に相逢うて得たるところは果して何物ぞ、憐れむべし我は竟に彼がために縊れ殺されたり、

無用の空想に迷うて現在の人間を解し得ざりし我は、一個の詩人たるよりも寧ろ一種の精神病者たりしなり、されど我は過れる其詩を以て人を欺かず世を僞らず、たゞ詩人として詩人たるの資格なかりしのみ、これに反して彼が神聖の戀と愛は何ぞ圖らむ、世に卑しめられて淫を賣る醜業婦よりも更に幾層倍の卑しき手段に用ひられし一時の假裝物なり、加之も我をして死に至らしめたる彼の巧妙は知名の小說家が意匠慘憺に作り出せる毒婦よりも遙かに勝りて殘忍を極めたり、

嗚呼、我は醜業婦のために殺されざりしを恨む、また惡漢無賴の迫害に刺されざりしを憾む、さらに盜賊の兇刃に斃れ得ざりしを怨む、

死に致されたる怨恨の一念より多少の我田引水に屬すべき點もあれど一讀凄慘の氣人に迫れり文中の瀨田豐子なるもの果して今いづこに在る我社は最も機敏なる例の方法に依ッて遠がらず此瀨田豐子を紙上に見えしむべし、また別に此縊死者が本所業平町の裏屋に住め

山口星影誌

る車夫に對して感謝せる一通の書置を存せりとの噂あり、

あはれ久しく八軒長屋に神韻縹緲たりし星影先生も、この新聞紙上を見れば一片の新體詩さへ呻り得ず、たゞ行方も知れぬ例の廂髪に愚癡を滾して、身を立つべき三十の曉、ぶらりと下りて死果てぬ、

星影先生が瀬田とよ子に對せし怨恨の一文を遺せし外、また別に熊公へ感謝せし俗用文の一通ありしがため、警察へ呼出されて本人生前の委細を問はれし時、熊さン兩眼の涙を握り拳に叩きながら、八軒長屋にありし當時の事より厩橋の闇に出逢ひし事まで具さに答へし後、旦那この敵を取ッて下せエ、あの阿魔め、あの阿魔ッちよを旦那、ふン縛ッて下せエと大聲あげて泣出せし體に、警官いづれも思はず動かされて、こゝに瀬田とよ子は最も嚴しく其影を追はるべき注意人物となりぬ、

加之も熊公、他に引取人なき星影先生の死骸を乞うて、ほろ車の膝掛に用ひし古毛布に包み、十文字に脊負うて八軒長屋へ歸り來るや否、その死骸を自己が塒へ安置し、三錢の香華を手向け、二錢の駄菓子を供物に備へ、あけて四十二の大男が小兒の如く泣きながら念佛を唱へぬ、

さて斯うなれば長屋中また捨てゝ置かれぬ大騒動、相も變らず朝鮮髯が第一に飛廻ッて、千三屋も鱶糞も馴染のない色狂者まで義理人情、お虎婆さへ今更殊勝氣に戸口より差覗いて掌を合しぬ、

『おい嚊ア、いくら悔ンでも仕方がねエから、兎も角も佛の始末だ、せめて棺樋だけの工面

よ、なァに警察の旦那に乃公ァ願ッて來たからな、龜井戸の火葬場へ持ッて行きやァ、養育院並に無價で濟む筈になッてるさ、しかし野邊送りだけでも何とか、差荷ひに仕ろ納める棺に納めて行きてエよ』

『眞實だねエ良人さン、お可哀さうに死ンでまで、這入る棺のないやうに仕やァがッたンだよ、あの畜生め、どこに居るンだらう、妾、口惜しくッて、くゝ口惜しくッてさァ』

『待ッてろ、乃公が怨念だけでも、ろくでやッて堪るもンけエ、だが差當ッて嗅ァ、どうしよやう』

『どうしようッて、良人さン、おゝさうだ、あるよ良人さン、あるよ』

『何、ある、どうするンだ』

『すッかり忘れて居たよ、そら、あの、神田の本屋さンがさ』

『や、なるほど、こいつァ氣が付かなかッた、大晦日の夜、いろ〳〵居酒屋で懺悔談話のあッた時、あの本屋へも二度と再び顔が出せねエと聞いたが、かうなりやァ出すも出さねエもあるもンか、よし、すぐ乃公が出かけよう、しかし、たゞ神田の本屋ぢや、無效だ、何とか言ッたッけな、さァ困ッたぞ、たしか文、文の字が冒頭にあッたよ、なァに先生の名を言ッて片ッ端から神田中の本屋を聞いて歩かァ』

『だッて良人さン、今こゝに出ちやァ、こンな時こそ幸ひ、あの千三屋か、八卦屋でも賴んだ方が』

『いけねエ、あの朝鮮髯、口ばかりで何の益にも立たねエ奴だ、昨日だッて長屋中の名代で、一言の下に連れて歸るとか何とか大層な事を言ッて來たンぢやァねエか、それに唐變木め、あの怪しい姿で、うろ〳〵と警察の門前ばかり往ッたり來たり仕てるからね不意に呼込ま

れてさ、青くなッてる奴を乃公が言譯してやッたくれエだ』

淺草町の木賃宿より古毛布に包まれて十文字に背負込まれし星影先生の死骸、また其まゝ軀井戸の火葬場へ十文字に背負出さるゝかと思ひの外、新しき棺桶に納めて樒の葉を蔽ひ、やうやう豆ランプ一個の筈が俄に三挺の蠟燭を點し聯ね、さのみ臭からぬ線香の煙を立てゝ熊公夫婦が施主となりつゝ、朝鮮髯と石作と鑛糞の西川三人、今夜の通夜を勤めぬ、

『さア、これで佛も浮ぶだらうよ、實ア棺桶の工面に盡きてね、神田の本屋とまでやァ氣は著いたが偖その本屋の名を忘れて仕舞ッてよ、嗅アと夫婦で途方に暮れて居たンだ、ところへ不思議ぢやァねエか、その本屋の手代が新聞に驚いて、不意に五圓といふ香奠を持ッて來たから、兎も角まづ斯う出來たのさ』

『いや、たとひ死骸を納める棺が無くッても、生きて居る時から一方ならン熊さンの親切だもの、通じないですか、きッと佛は喜ンでるよ、ね、これが無緣の他人で出來る世話かね、この幸運齎の如きは只それへ、一包の寸志を備へたばかりが關の山だ』

『おい〳〵朝鮮さン、さういはれると困るよ、この石作は充分及ぶだけ仕たいといふ志があッても、生憎く何一個、備へる力が無いンだね』

『熊さン、この西川は片棒を荷ぐよ、それで佛への申譯だ』

『なアに斯う出來て仕舞やァ、別に誰も彼もねエよ、今夜かうして通夜を仕てくれりやァ佛の滿足さ、時に八卦家、汝の一包は何だい、どうも開けずに置いてくれといふから其まゝ開けも仕ねエが、まさか金ぢやァ無からう』

『無論、金でないから猶更、其まゝ開けずに置いて貰ひたい、たゞ拙者の寸志、佛にさへ屆

けば宜いンだ』

『そりやァ、さうだがね、折角の志を施主に立ッた乃公が知らねェも變だ、第一このまゝぢやァ始末に困るから汝の面前で開けるよ』

『や、熊さン待ッた、今こゝで開けられちやァ少々』

『なぜ、何故だ』

『何故でも聊か、佛へ對して失禮に當るからね』

『妙な事をいふぢやァねェか、佛へ備へたものが佛へ失禮に當るたァ、それも他の手前、金だと言やァ隨分お察しの宜い熊さンだ、默ッて此まゝの寸志だけに止めても置くがね、がさ〳〵と何だか這入ッてるやうだぜ』

石作と西川の二人が朝鮮髯を遮る間に熊公その一包を取ッて開けば、ばら〳〵と膝に滾れし麭麺粉の屑、加之も一合ばかり、錢にして三厘か五厘なり、

『なゝ何だい、こりやァ、寸志によりけりだ、人を馬鹿にするない、え、おい、いくらこの佛が召食ッたからッて、ありやァ時と場合で仕方がねェからだ、わざ〳〵お好で召食ッたンぢやァねェぞ、汝が苦駄張ッた死骸へ篋竹や算木の削りッ屑を備へて浮べるけェ、この八卦よい屋め』

石作と西川の二人、こゝぞと左右より首を振立ながらの苦笑ひ、

『なるほど、流石ァ違ッたもンだな、どうしても我々より一枚の上手だよ、いかにも手輕の御寸志で結構だ、ハヽ、、あれで濟めば我々の佛の召食ッた燒芋の薄を備へるンぢッたねェ、惜しい事を仕たよ』

何事も第一番に罷り出で第一番に凹垂れる朝鮮髯、ぐうの音もなく片隅へ身を縮めて小聲に

念佛を唱へ始めぬ、

なるほど寸志といへば寸志、加之も生前に召食ッた事はあれど、麵麭粉の屑とは八卦よい屋め、あまり人を馬鹿にせしのみか第一この佛に對して濟まざる申譯のため、小肥りの西川と脛達者の石作が交代の役目に俄に振付けられ、業平町より龜井戸の火葬場まで熊公と差荷ひの片棒を荷がされし朝鮮髯、へと〳〵に弱り果てゝ勞るゝ足を引摺りながら、やう〳〵自己が塒へ這ふが如く歸り來りぬ、

かくと持受けし熊公が壁越の聲、

『今かね、何を仕て居たンだい、遲いぢやァねエか、乃公なンかァ二時間も前に歸ッたぜ、しかし御苦勞だッたよ、それでこそ佛も滿足だ』

『佛は御滿足だらうが、生きた人間一疋の半死だよ熊さン、この樣子ぢやァ今夜、淺草へも出られないさ』

『正月早々、さう出なくッても宜いぢやァねエか、まだ今日は四日だぜ』

『いや、その四日が大切だ、三日の間は千里同風の例外だが、偖いよ〳〵四日からが一年中の運氣始めだ、考へて見ると高い香奠に當るよ』

向側より首を突出す千三屋の石作、

『や、今お歸りかね、麵麭粉の屑が妙に祟ッて、とンだ氣の毒だッたよ、ひよろ〳〵變な腰付で、蟷螂が小芋を荷ぎ上げたといふ工合、よほど危なかッたぜ、實ァ見兼ねたがね、折角あゝして佛のために荷いで行くものを、不意に此方へ讓ッて貰ッちやァ濟まないと思ッてさ』

『おい〳〵石作さン戯談ぢやアないよ、半泣の一所懸命で、もし捨てられるもンなら放り投げて遁出すところだ、それほど氣の毒と思やア何故、遠慮なしに途中で代ッてくれないンだ、この幸運齋は生れて以來、肩に物を乘ッけた事のない人間だからな、みり〳〵と首の脇が痛ンで、腰の骨も脚の筋も違ッたやうだ、當分まづ御病人の體だぜ』

筋向ふの西川また首を突出しぬ、

『なアに安心するが宜いさ、すぐと癒るよ、もしそれが病源になッて萬一の事がありやア、その時こそ我々二人で神妙に荷ぎ出すからね』

朝鮮髯、いち〳〵出損うて今更喰ひ付く相手もなく、あはれ其まゝの無言に凹みしが、ます肩と腰との痛みに澁面を作りながら、腹立まぎれの身を横へし折しも、表障子の破れ目より鄰屋の花野露雄、そッと差覗きぬ、

『嘸お疲でせう』

『でせう、とは俳優さン拙者への挨拶かね、勞れたか疲れないか葬式に立たなくッても今の話で分りさうなもンだ』

『ハヽヽヽや、さう取られちやア困りますよ、實は少々、御相談かた〴〵お願ひがあるンですから』

『まッ平だ、御免を蒙らう、例の心中沙汰で澤山だよ』

『こりやア酷い、決して、あンな馬鹿な事は二度と再び、ハヽヽヽ早い談話が失禮ながら、こゝに三十錢といふ見料を持參したンですがね、ちよいと卦を立てゝ戴く事は出來ますまいか』

朝鮮髯、むくりと起直りぬ、

『まア兎も角も這入りなさい、そも〳〵卦は天地自然の示すところで、つまり人間に愛憎好悪のない神易の表現だ、よろしい、それならば篤と謹ンで御相談に與からう』

例の心中沙汰に手盛の一杯を喰されし以來、この色狂者めと睨み付けて、ろくに物も言はざる奴なれど、思はぬ不意に三十錢の見料と聞くや否、むくりと起直りし朝鮮髯、肩の疼痛も腰の疲勞も忘れ果てゝ俄に算木筮竹を取出しながら、急に容姿を改めつゝ仔細らしけの咳一咳、

『生涯の運氣か今年中の吉凶判斷か但しは差當ッての一事一物に就いてか、いづれに致せ、天地の撰に體し神明の德に通ずとあるからは、たとひ壁一重に鄰り合ッて朝夕かう心易く顏を見合ッて居ても卦の上には一點の私心もないから、かりにも怪疑を挿ンでは不可よ、そも〳〵易は廣大悉備、自然に合する宇宙の理で、古を去る遠しと雖ども遺經尙存すと言ッて、則ち聖人の講じ遺された道だ、加之も時に隨ひ變易して以て道に從ふとは、つまり汝さンが喜怒哀樂に依ッて生ずる顏貌を其まゝ明鏡にうつすが如く、どうしても爭へない身の運勢が自ら卦の象に現はるゝ理由で、これ固より凡人の爲す業でなしぢや、よろしいかな』

何が宜しいやら、いふ奴も聞く奴も一切さらに分らねど、分ッた面をして饒舌れば、また分ッた面して首肯く花野露雄、いかにも朝鮮髯に占はるゝ奴なり、

『なるほど、はゝア、さういふもンですかね、ところで生涯の運氣も今年の吉凶も暫く置いて、如何でせう、差當ッて今この胸に思ッてる事は』

『まづ惡くもないやうだな、大した事もなからう』

『やッても宜いンですか』

『さて宜くもないさ、しかし悪くもないさ、兎も角もこのところは乾坤の中に迷ッてる卦だよ』

『困りますな、その中に迷ッてるから、占ッて貰ひたいンですよ』

『いや、さうだらう、さうあるべき筈だよ、そこで幸運竇これを神易にかけて見ると、お待ちなさいよ、はて、これだから、かうなる、これを翻して、その裏は斯うだから、やはり表は斯うだ、則ち震下坎下、坎下艮上、また離下乾上、むゝ段々と出て來るわい、さて巽下巽上、兌下兌上、さア出たぞ、〳〵、さア分ッた、いよ〳〵分ッた』

『めちや〳〵に算木を置替へて、霄闇に盗賊を追詰めしが如く、さア出た、分ッた〳〵と騒ぎ立つれば、いよ〳〵煙に巻かれし花野露雄、おもはず小膝を進めて獅子ッ鼻の下より例の反ッ歯を剝出しぬ、

『どう出ました、どういふ工合に分りましたね』

『安心なさい、頗る宜いね、占易の表は大極上々吉、よし裏に翻ッたところで、凶と雖ども居れば吉なり順へば害せずとある、よほど頼母しいね、近來これは稀に出る卦だよ、今その胸に思ッてる通り行うて更に少しの差支もない、所謂る轉ンでも空手は起きずぢや、ハヽヽ、時に近處合壁の交際は交際、この三十錢は一點の私心もない神易に供へるよ』

今その胸に思ふ通り行うて更に何の支障もなし大極上々吉といへど、實は何を思うて居るやら朝鮮髯さらに分らず、たゞ花野露雄が自己一人り胸に思ふので自己一人が頗る安心の體なり、

占ひし奴が何事も時の勝負に八卦よい屋の朝鮮髯、占はれし奴が本人これでも俳優の心得を以て罷り在る花野露雄、今この胸に思ッてる事と問へば、その胸に思ッてる事いかにも大極

上々と答へて、一方は平氣に澄し込み一方は俄に安堵の體、盲目が闇の夜の雲を掴み合ふよりも猶更面白き取組なり、

その翌日の夕暮、壁越に念を押出す花野露雄が聲、

『きのふの朝、占ッて貰ッた通り、いよ〳〵今夜、やりますぜ、この胸に思ッてる事を』

朝鮮鬱、わざと重々しき體、

『神易の示すところだよ、疑はずに思ッた通り、やりなさい』

『大丈夫でせうな』

『よろしい、うけ合ッたよ』

『有難い、さア占めたぞ、無論、やるにしても萬々一、仕損じはありますまいな、も一度あらためて安心を仕直したいンですから、氣の濟むやうに何とか言ッて下さいな』

『出來るとも、すぐ出來るよ、この事に就いては自然の運氣、汝さンに向ッて來てるからね、たゞ汝さンの覺悟次第だ、つまり手を開くと握るとにあるやうなもンだよ、握れば、出來る、開けば去るといふ理窟でね、兎も角も一旦、握ッたら放さないが宜い、しッかり握ッて仕舞へば思ッてる事が必ず成就する、放しちやァ無效だよ、いけないよ』

『や、ふしぎだね、なるほど爭はれないもンだ、餅屋は餅屋、その道になると恐ろしいやうだ、これと打明けて言はなくッても、思ッた事に自然と合ッて來て、言葉の調子にまで現はれますね』

『そこが神易だよ、開いては折角の運が遁げるぜ、たゞ一所懸命に握るべしだ、そも〳〵この運といふものは天地の間に絶えず飛歩いて、彼奴に取ッ付かうか、此奴に喰ひ付かうかと、實は先の方で迷ッてる位だから、此方は只こゝぞといふ時を覘ッて握れば宜いンだ』

『ます〳〵有難い、實ア先の方から迷ッて來てるンですね、たゞ此方は握れば宜いンですね、さうとは知らずに馬鹿々々しい、さンざ氣を揉ンで、つまらない餘計な苦勞を仕ましたよ、ハヽヽヽ』

『しかし、それが時節到來だ、いくら苦勞して氣を揉ンでも、先が來なくッちやア不可さ、ところが今の汝さンには、たしかに來てるらしい』

『なるほど、さう聞いて見ると、さうかと思ひ當る事がありますよ』

『あるだらう、自然に通じて來た一の證據だ、何となく氣が勇ンで、心が嬉しくッて堪るまい』

『堪るも堪らないも、そろ〳〵氣が變になッて來ましたよ、しッかり御禮を仕ますぜ、三十錢は安い、こりやア安いもンだ、いづれ握ッた上、あらためて見料を差上げませう』

『もはや既に我しらず、ゆッたりと心の大きうなッた其調子が卽ち、猶更出來る瑞相だよ、ハヽヽヽ』

朝鮮髯、いよ〳〵資本不要の神易を振かけて出來る〳〵といへば、花野露雄、ます〳〵白癡の骨頂に上り詰めて自己一人が何をか呑込みし恐悅面、其まゝ座にも得堪へず飛跳ねて跳り廻りぬ、

『さアかうしては居られないぞ』

日本橋の濱町二丁目に格子づくりの二階家、さのみ見立たねど、こゝかと見れば、なるほど、さうかと思はるゝ船板塀に小庭の青葉を圍うて表札は眞白の陶器に漆墨の女名前ながら、その實は宮城野萩之助といふ名を兎も角も新聞の劇評に外されぬ新俳優の隱れ家なり、

表札の本人は年ごろ二十六七、いはずとも知れし身の果、色は淺黑けれど垢ぬけし目鼻立くッきりと冴えて、どこやらに一癖きかぬ氣の凜味を含みし風情、結び髪のまゝ荒き大島の常著に黑繻子の帶ゆるく、籠行燈の灯影に長煙管の煙を吹きながら、片手を箱火鉢の角に頰杖の下目遣ひ、その前に例の反ッ齒を剝出して今更の追從輕薄は花野露雄、あはれ此奴も男の端なり、

『もう何時でせう、先生は一時間も前に、劇場を出られたンですよ』

『なァに歸るか歸らないか、當になる人ぢなァないのさ、また途中から風の工合で、どッか妙な方角へでも散ッて仕舞ッたンだらうよ、ホ、、、』

『困りますなァ、かういふ事を申しちやァ何ですが、全體、貴女が、あまり萬事に捌け過ぎるのが却ッて毒ですよ、やはり先生の爲ですから、お嫌でも少しは世間體の野暮になッて、取締ッて下さらないぢやァ』

『あら、花野さン、をかしく變に荷ぎ上げても無效よ』

『いや、眞實ですよ、第一また先生も先生だ、いくら貴女が手放し過ぎるからッて、あゝ好い氣になッて泳ぎ出しちやァ濟まないさ、實ァ貴女のために現在、あれだけの地位になれた人ですからね、無論、花野露雄は先生に付くべき筈の人間ですよ、しかし先生の足跡に付いて、これから一所懸命に修行も仕て見たいといふ人間だから猶更先生のため、貴女に御心配をかけたくないンですよ』

『おや、まァ御親切だ事、だがね花野さン、どうせ堅氣の男を持ッてるンぢやァなし、いちいち目に角立てゝ、さうも言へないさ、馬鹿に甘くなッてる理由でもないが、また外で騷ぎ女のないやうな人ぢやァ、妾の氣には入らないの、ちと不足ですのよ、ホ、、、』

『なるほど、さう聞けば、さうかも知れませんな、しかし此ごろの新橋は少々、油斷がなりませンぜ』

『新橋でも土橋でも宜いぢやアありませンか、そンな事を妾にいふよりも花野さン、自分の藝に身を入れてね、何でも早く一役を付けられるやうにならないと無效ですよ、あの人だッて、いつまで部屋にばかり使はうといふ氣はないンですからね、また妾だッて蔭ながら口を添てあげますさ、ね、まだ年は若し、顏の道具も地で見るより舞臺の方が、きッと能くなる性質だから、人は何と言ッても關はず自分は自分で勉强なさい、きけば近頃、どッかへ出て仕舞ッて劇場の方にも寢泊り仕ないといふぢやアありませンか、それが不可さ、たとひ辛くッても今のうちは辛抱が第一ですよ、やはり場を遠退ちやア損ですよ、をりを見て絶えず這家へも來てさ、不在でも妾が居れば、また時折は著替の不自由をせずに濟む事がありますよ、ね、實は他の人達が汝さンばかりを妙な工合で、何だか除外物のやうにするのが妾、氣の毒で堪らないンですよ』

『いや、有難う御坐います、以後、その決心で、やりますから、どうか何分、よろしく願ひますが、これでも地顏より舞臺の方が好くなりませうか』

『なるともさ、大體さう惡いンぢやアないもの、修行次第で段々と貫目が添ッて來て、つくり工合さへ巧妙けりやア、うちの先生より却ッて舞臺晴のする面相だよ、だから氣を落さずに充分、やッて御覽、うか〳〵すると妾だッて無事は置かないよ、その時こそ今の世話を恩に押掛けてさ、ホ、、、、』

『こりやア酷い、戲談にも程度のあッたもンだ、ハ、、、何だか馬鹿に仕られてるやうで』

『何、馬鹿にするもンかね、俳優さへ上れば自然に其他の萬事も上ッて來るもンだよ、しか

し、さうなれば幾何この妾が騒いだッて見向も仕ないンだらうね、さンざ苦勞さした過去の事を忘れて仕舞ッて、よくも今更平氣に浮氣が出來るよ、だから男は憎らしいのさ、えゝッ自烈ッたい』

實は今まで心の底に忍びし我男の事、おもはず口に出て癇癪の遣場なき眼前に幸ひ花野露雄が膝頭、ぎゆうと捻れば此奴また朝鮮髯に例の神易を振かけられし白癩の骨頂、あはれや前後無差別こゝぞと其手を握るや否、さらぬも元來きかぬ氣の女、長煙管の雁首に眞正面の出額、ぽかりと喰はされて、きやッと叫びぬ、

『痛いッ』

『おや、生きてるの』

朝鮮髯の神易、握れば出來る筈のところ、眞正面の出額に長煙管の雁首、ぽかりと喰うて其まゝ引据られし花野露雄、加之も癇癪の青筋を立てし女の前に平蜘蛛の如くなりて、うかうかすれば二度目の雁首また飛ンで來さうな形勢不穩、頗る危險なり、

『何だッて妾の手を握ッたンだね、どういふ當り年の心算か知ないが、ふざけた事をする南瓜野郎だよ此奴は、づう〳〵しいにも程度のあッたもンだ、さア何故この妾を甘く舐めたか、何故この妾に變な眞似を仕かけたか、それを立派に言ッて見るが宜い』

『いえ何、けゝ決して、さういふ不埒な料簡では、しかし何とも申譯の御坐いませンこッて』

『あら、ふしぎだね、それでも申譯のないことを知ッてるの』

『へエ、存じて居りますが、つい、うかと致しました次第で、どうか今夜の事だけは、この場かぎりに』

『いけないよ、存じて居られて猶更誰が承知するもンか、うかとする事も事に依りけりだ、

かりにも師匠の女房が弟子も弟子、澁ッ柿の帶にもなれない奴に小いやらしい、手首を握られてさ、啞だッて默ッちやァ居ないよ、第一また汝のやうな御念の入ッた薄馬鹿はね、かういふ時に物の制裁を付けて置かないと、いけ太く餘所へ往ッて何を、どんな事を言觸らさないにも限らないから、今夜の事は此まゝの無事に濟まされないよ、迚も見込は無いが、可愛さうだと思へばこそ、かうせエの、あゝせエのと心易く親切に言ッて遣りやァ、ホヽヽ、呆れの宙返りを二三度うッても足らない奴だよ、すぐと好い氣になッてさ、よくまア其面で大膽に、あンな眞似が出來たもンだ、少しは恥といふ事を知らないぢやァ馬鹿は馬鹿ながらも人の哀れ氣が無くなるよ、いくら付け上るに仕ても自分の身とね、眼前の相手を考へた上のこッたよ』

『へエ恐れ入ります』

『へエ恐れ入りますもないもンだ、そら、その背後に姿見の鏡があるからね、ちよいと振返ッて見直すが宜い、地顏より舞臺晴がすると言ッたのは一所懸命の修行次第で、もし三枚目の端ッくれにでもなれるだらうかと氣に張を付けてやッたンだ、大體その不器用でその御面相で俳優になりたいといふのが間違ッてるよ、小色の一人も持ッて見たいと思やァね、汝のやうな男は大道のヨカ〳〵飴屋にでもなッてさ、まぐれ當りに浮氣ッぽい子守か山の奥の亭主に死別れた乳母さンか、それも最初からア無效だよ、根氣よく働いて五六年も剛染になッて、出雲の神樣の油斷を見澄ました上、お情に預れば生涯の大出來だ、その覺悟も無くッて生意氣に、うか〳〵世間の女へ妙な眞似をすると罰が當るよ、ろくで行かないよ、わかッたか』

『御道理な事で』

『ホ、、、段々と考へりやア、自分でも道理だと氣が著くだらう』

『以後は、きッと心得ますから、今夜だけのところは』

『お心得、他のこッちやアない自分のためだよ、さア一圓こゝへ膏藥代を出すからね、外の人達が歸らない前に早く出るが宜い、ほンとに一時は、誰か呼びに遣ッて、小ッ酷い目に逢はさうかと思ッたンだよ、みり〳〵と癇癪に觸ッて腹が立ッてさ』

片手に額の疵を押へ片手に一圓紙幣を戴きつゝ、すご〳〵と歸り行く男一疋、これで此奴が出來もせぬ色氣ありとは猶更以て面白し。

宵より淺草の山門脇へ例の神易を荷ぎ出せし朝鮮髯、はや十二時に近き頃、やう〳〵歸り來りて、ごそ〳〵と蟹の如く自己が穴へ這込みつゝ、其まゝの黑闇に丸寢の身を横へしが、折しも壁一重を隔てゝ漏るゝ吐息に、さてはと思はず鎌首を擡げぬ、

『や、鄰屋の色男いつの間にか歸ッてるンだな、どうですい、神易の示すところ果して違はず、大極上々吉、うまく握れましたらう、何も三十錢の外を催促する理由ぢやアないが、だンまりの猫糞は聊か酷いね』

『握る事は握りましたよ』

『さうともさ、握れないで何うする、確かに疑ひもなく卦の象に現れたンだもの、あれで握れ無きやア幸運齋この占易を明日から廢めて仕舞ッても宜いくらゐだ、ハ、、、しかし先づ以て結構だ、どンな工合に握れましたね』

『握る事は握ッても、その握り工合が面白くないから、かう溜息を吐いて夜の目も寢られず鬱ぎ込ンでるンでずよ』

『何、面白くない、はてね、握る事は握ッたが面白くないとは、ふしぎだね、さういふ筈はない、どうしても理の當然、さうあるべき筈のもンぢアない』

『さういふ筈がなくッても現在、かういふ、なさけない始末になッたンですよ、面白くないにも段々あるが、いやはや、この面白く無さ加減と言ッたら、お談話にもならない結果で』

『ます〳〵變だ、あまりに物が間違ひ過ぎて呵しいよ、こりやア察するところ、汝さンの握り工合が悪かッたンだらう、そも〳〵神易の』

『さゝ其、その神易だ、實に驚いた神易ですぜ、その神易を安心して守ッ・から斯ンな痛い目に逢ッたンだ』

『なアに、さうでない、こゝぞと思ふ坪を覘ッて、しッかり握れば、何事によらず、きッと出來る筈だ、もし出來ないとして見れば、これ卽ち汝さンの握りやうが足らないンだ、自然の運勢、實は先から來てるンだもの、惜しい事を仕たよ、開けば去るといふのは這處だ殘念ながら當分の間、ちよいと不可ね、まづ暫く置いて其うちに再度、あらためて出直すンだ』

『どゞ何うして、なか〳〵先からア來て居ませンぞ、當分も暫時も、うか〳〵出直せるもンですか生涯もう無效だ、まだ握ッたか握らないうちに、ほかりと不意の唐突ですもの、それも手加減をして生優しく出る事か、邪慳に眞正面から癇癪まぎれの長い奴でね、おまけに意地わるく新調の故か、雁首の小太い皿の大きい薄張と來たから堪らない、ぐら〳〵目が眩ンで一時、氣が遠くなりましたよ』

『や、全體、そりやア何のこッたね、どうも談話の樣子が變だ』

『あンな目に逢ッちやア、誰だッて樣子が變になりまさアね、兎も角も夜が明けたら見て貰

ひたい、とンだ神易の効驗を蒙ッたもンだ、二十四の今日まで滿足に來た男の生面へ長煙管の極印さ、どう考へても一圓の膏藥代ぢやァ差引の勘定が合はない、もしこれが斯うな

る筈に出來た分相應かと思へば、我ながら聊か心細くなりますよ、かはいさうに、まだ行末のある人間だもの』

もはや三十錢の外に取れない奴と思へば、朝鮮髯、其まゝ音もなし、

うき世の落武者、この八軒長屋へ流れ込む奴は、いづれ生死の境目に狼狽廻りし身の果、もはや滿足に其日〳〵の一升米を買出す力もなく、ひよろ〳〵として來るかと思ひの外、かの星影先生が古巢へ兩肩を山の如く怒して悠々たる風采態度、のそりと住込來りし大男あり、みれば三十前後の大兵肥滿、五分刈の頭に鍔廣の中折帽子を戴いて、その下より顏色まッ黑の大眼球羽織も著物も同じ紬の綿入に、さのみ色も變らぬ白縮緬の兵白帶を寛く纏ひ、新らしき紺足袋に桐の俎板下駄、一番形の大鞄に銀の太き握り手を付けしステッキ、聊か古びた

れど大の白毛布三枚に空氣枕、ごろ書生の落込みし體にもあらず、破れ壯士の身を忍ぶ體にもあらず、いづれにせよ八軒長屋の一蓮托生には目立ちて不似合の人物なり、

加之も言葉は案外の優しき、人に對うて一點さらに態とらしき風情もなく、その恐ろしき大眼球に一種の愛嬌を浮べ、その固く結べる一文字の口より輕く笑うて、まづ壁一重の鄰屋は例の熊さンが許へ歩を運びつゝ初對面の挨拶、

『始めて御目にかゝりますが、大浦卓三といふもンですよ、どうかね以後は萬事お心易く願ひたい、往來の雜踏に面した市中の住居と違ッて何となく愉快だ、面白い、この外に出入のない一方口だから定めて皆さン親類同樣でせうよ、ねェ、ハ、、、、、、しかし、かういふ親類が不意に飛込ンで來ては、どうせ御厄介だ、や、御厄介の皮切として伺ひたいがお仲間入の印を、どういふ工合にすれば宜いでせう、やはり蕎麥ですかね、併し他の振合に過ぎても、足らなくッても失禮だ、御面倒ながら其邊を指圖して下さらないか、何、旦那、そりやァ不可、それでは困る、今いふ通り大浦卓三といふもンですよ、覺えて居て下さい、ハ、、、大浦卓三さ、ハ、、、』

この男この長屋には過ぎたる風采言語、いかなる浮世の仔細に追はれて斯くは落込來りしか、どうしても九尺一間の破疊三枚に寢るべき者でなし、

あればあるもの、來れば來るもの、大浦卓三が星影先生の古巢へ住込みしより二日目の朝、お虎婆と壁一重の鄰屋、例の廂髪が立去りし古巢へも一人、また流れ込みし奴あり、

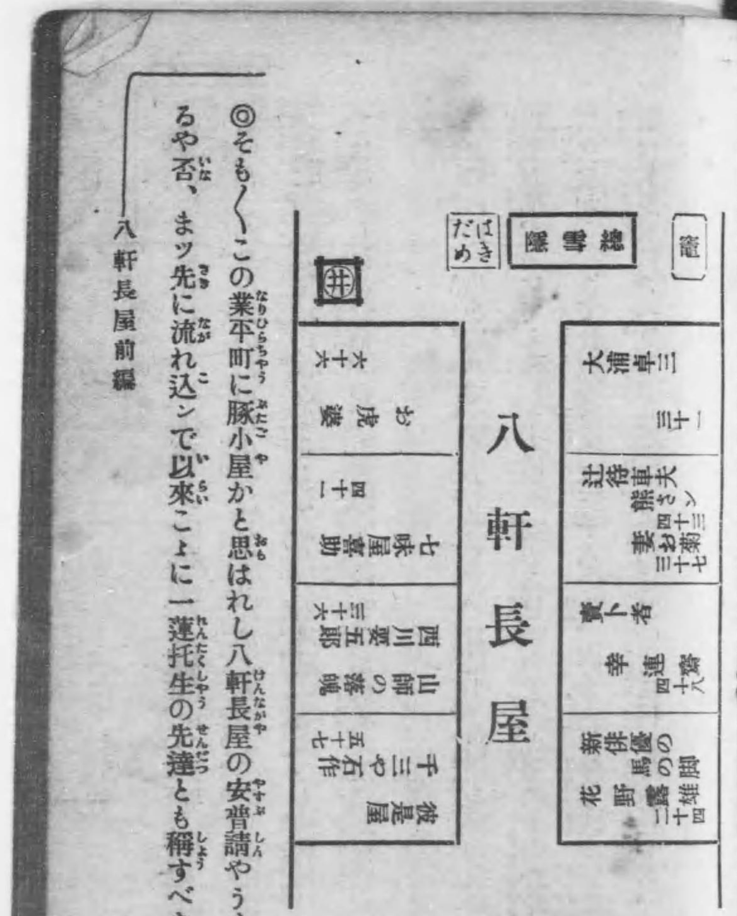
されど此奴は八軒長屋に分相應、いかにも不思議のない人品骨相、この寒中に女物を仕立直せし古袷一枚の上より小兒縞の綿入ちやン〳〵、はや人間の色艶は褪め果てゝ青白き顏の肉

は落ちたれど、あくまで貧乏馴れて今更驚かぬ體、きよろ〳〵と油斷なき目色を光らしつつ、何を包みしか背負ひし大風呂敷を抛込むや否、尻ひッからげし空脛に草鞋穿のまゝ、小さき紙袋を幾個か手に握ッて長屋中を片ッ端より一列の總挨拶、

『へい、どうか宜しく、七味唐辛子の喜助といふもンですが、本人は至ッて甘く出來た野郎で、ハ、ヽ、ヽお蕎麥のところは勝手ながら商賣物の藥味だけで堪忍を願ひますよ、甚だ少少づゝですが時節柄この通りの始末でね、ハ、ヽ、ヽ、』

もはや八軒長屋に一軒の空屋もなく、それ〳〵の運命もろとも住込みぬ、

いづれ浮世の箒に掃除せられし芥溜なれど、まづ人間は暫時そのまゝに置いて、さッと筆端の一掃除に衛生上のため、長屋の隅々に積りし塵だけを掃出しぬ、



◎そも〳〵この業平町に豚小屋かと思はれし八軒長屋の安普請やう〳〵叩き大工の手を放るや否、まッ先に流れ込んで以來こゝに一蓮托生の先達とも稱すべきは彼お虎婆また入らざ

る無用の歳を重ねて今年は六十六の春、近き隅田川の土堤に枯木の花は咲けど、おのれは芽も吹出さぬ身を何のために生伸びるやら、加之も猶更無事息災に婆婆を塞いで、いよ〳〵業突張に抜殘る亂杭の齒を剝出しながら、石地藏の胸倉へも武者振付く慾の皮面、されと百までは生きられね定命、いづれ苦駄張るべき此お虎婆の最後が見物なり、

◎身に白銅一枚を取ッて置く力もなくて、口に十千萬圓を癲癇病の泡に等しく吹出す奴は西川要五郎、あけても暮れても西の空のみ打眺めて、九州の金山が今にも飛ンで來るかと足を爪立ながら、さて此奴も今年は三十六の春、いよ〳〵年と共に新なる一陽來福といへども、實は貧乏神にさへ見放されて取付かぬほどの男に何が舞込むやら、

◎その壁一重には相も變らぬ千三屋の石作お虎婆に次で今年五十七になりし長屋中の老爺なれど、三歳兒の寢言よりも覺束ない家庫地面の彼是に年が年中を駈歩いて、半日も家に居れば其間に折角の運を取外すかと立騒ぐ因果もの、加之も吹出す泡は鄰屋の鑛糞野郎に劣らず、現在の九尺一間さへ持切れぬ身に本所の奥の二萬坪とは、此奴の行末も面白し、

◎同じ貧乏の底に落込みながら、飢ゑても凍えても例の熊公は例に依ッて件の如く出來たる天晴れ男の熊さンなり、これに連添ふ嚊アお菊また同じ食ふや食はずに居ても泥溝板を跳返す不貞腐れの山の神とは違うて、一點どこやらに優し味のある世話女房、良人は四十二の厄年あけて妻は三十七の春、まして當世の學者が目を剝いて探し廻る清き愛も尊き情も鐚一文に賣付けぬ夫婦圓滿、その貴重の寶を長屋の奥の襤褸布子に包ンで知らぬ顔に濟し込むとこ

ろ、猶更有難し、

◎何事にも第一番に驚いて狼狽出す八軒長屋の名物は、八卦よい屋の朝鮮髯、十年以來の夜な〳〵淺草に神易の弓張提灯を照して算木筮竹を捻くり廻せど、いまだ曾て懐中に一圓紙幣の納まりし事なく自前酒の一升にも有付かぬ幸運齋、もはや人生五十の通り相場に二年を餘せるのみ、たとひ乾坤が轉倒するとも、あはれ再び出直して這出すべき穴も道も塞がりつゝ只これ漂浪漂浪として飢饉年の幣間に等しく、痩こけて無用の愛嬌あるだけが此奴の藝なり、されど朝鮮髯、みづから自己の骨相を觀て曰く、乃公は死際の三日に生涯の運を掻集めて萬人に羨まるゝ筈ぢやと、兎も角この八軒長屋で息を引取らぬ覺悟が殊勝なり、

◎壁越の心中狂言に持前の馬脚を現はして、長屋中に謝罪證文一札を取られながら、まだ目の覺めぬ色狂者、握れば出來る筈と師匠の女房に手を出して長煙管の極印を打たれながら、恥を恥と思はねば更に懲りもせね花野露雄、もはや面倒なりとて其後は一人の相手を定めず、いよ〳〵世間一體の女に對うての戀病、闇に打出す鐵砲玉の如く、誰にか煩ひ中てゝやらうとの一心より、なま白き顔に青味を帶びて目の色まで血走りし此難物が、蹂躙られし野邊の下草さへ萠出る自然の春に逢うての振舞、いかで鼻持のなるべきや、凡そ世の中に身の程を知らぬ無分別者と借りた金の利ほど怖ろしきものなしとは、さても此奴の事なり、

◎人に遠く神に近く百代の後までも傳へらるゝかと思ひの外、あはれ一片の新體詩も現在の人間に唄はれず、淺草町の木賃宿に首吊往生を遂げし星影先生の古巣へ、近來あらたに住込

みし大浦卓三といふ大兵肥満の三十男、そも〳〵いかなる浮世の割れ目より流れ來りし落武者やら、この八軒長屋に不相應の人體いよ〳〵訝かしく、九尺一間の破壁三枚を再び打ッて出づべき神算鬼謀の足溜とせしか、但しは身を忍ぶ隠れ家に世上の毀譽褒貶を避けンとてか、もしや影を慕うて追來る敵を防ぐに屈竟の場處と見込ンでか、まづ暫時は天機こゝに漏すべからざる奴なり、

◎大浦卓三に何の因縁なけれど、星影先生に神聖の戀の質物を切賣せし例の瀬田とよ子が古巣へ、その翌日いづこよりか流れ込みしは七味唐辛子の喜助とて、見るから此奴は貧乏剛れし四十男、蕎麥の代りに商賣物の藥味だけを配り歩きし體、いかにも素早く、痩こけし面相は朝鮮髯に似て萬事の立振舞に氣輕の調子は石作に似たれど、ぎろりと底光りの目色に何とやら油斷なき一種の凄味を帶びて、なか〳〵千三屋と八卦よい屋の類にあらず、うか〳〵すれば此長屋より案外の一物を産出すべき奴、人しれぬ心の底に七味の上の辛い味を持ッた奴なり、

人間は其まゝながら年と共に多少また新なる運命に出喰すべき以上の六人へ、正體の分らぬ大浦卓三と素性の知れぬ七味唐辛子の喜助と二人の新來を加へて、もはや一戸の空巣もない八軒長屋、さらに此上いかなる浮世の風に吹かれて幾度の新陳代謝あるべきか、ついでに其後の行方を暗ませし例の廂髪二女と三人の破戸書生、あのまゝ捨てゝ置かれぬ奴等、あくまで追窮して必ず引ッ捕へ來るべし、

東京の中央に所謂る土一升金一升の軒を竝べし大通街はそろ〳〵取毀ちの運命に近づけど、川を隔てゝ本所の場末に巣を構へし業平町の八軒長屋、いまだ市區改正にも取拂はれず、地震にも潰れず火事にも燒けず、なほ依然として家は舊のまゝに古く人は益々貧乏達者に生殘れり、

何の因果か、そのまゝ引きつゞいて貧乏動ぎも出來ぬ居殘りは、あはれ浮世の辻俥に九尺一間の樹も取り兼ねし熊さン夫婦と、夜な〳〵淺草の薄闇に神易の弓張提灯を照しながら、自己の塒に豆ランプ一個もない八卦よい屋の朝鮮髯と、いつも本來の馬脚を現はしながら恥を恥と思はねば恥かいた例もない色狂者の花野露雄と、いつまで生きて居たくもないが殺し人もないと吐す業突張のお虎婆、あけても暮れても的のない九州の空のみ眺めて泡を吹く鑛夫

野郎の西川要五郎と、十年以來の彼是に蚊の脛を飛して歩く千三屋の石作、以上六人に新來の二人は、正體の分らぬ大浦卓三といふ三十男、かの首吊往生せし星影先生の空巣へ住込み、素性の知れぬ七味唐辛子賣の喜助といふ四十男、かの瀬田とよ子と松坂あさ子が遁出せし空巣へ住込ンで、もはや一戸の貸家札もない八軒長屋、いよ〳〵こゝに一蓮托生の閻浮提を開きぬ、

我國の統計上、固定資本と流通資金を別にして、現在その所有金を人口に平均すれば、一人に付いて三圓の内外、その體量の平均は十三貫目の前後、家宅の面積は一戸に付いて七坪八合の餘、男女一切の食料より一日の厠へ落すべき汚物の量は糞が二合五勺となり尿が七合八勺となり、大小便を合して一人に一升三勺づゝの割合、いの數の上より見れば八軒長屋に住むもの、あはれ果して滿足に一人前の人間ありや否や、

一人に付いて三圓の平均は偖置き、やう〳〵其日の飢渇を凌いで銅貨一枚も無事に殘らぬ境涯、體量とて浮世の風に肉を殺落されつゝ骨と皮とに瘦こけたる貧苦の身が何として十三貫目を保つべき、中にも例の石作と朝鮮髯の如きは五體に纏ひし襤褸ぐるみ八九貫目あるか無しかといふ、なさけない奴、住む家の面積は固より長屋一棟の割壁九尺一間づゝの破疊三枚これを坪數に直して一坪半、糞と尿を合して一升三勺づゝの大小便さへ、年が年中の空腹より迚も一日の平均に放出すべき筈なし、

されど車夫の熊さンは流石に勞働者とて十四貫目餘、鑛糞野郎の西川も此奴また不思議に瘦衰へぬ小肥りの十三貫目以上ながら、貧乏も塒も同じ浮世の底の一蓮托生、たま〳〵湯水を飲過ぎて七合八勺より多き尿は放出せど、悲しや糞のみは未だ曾て一人前の二合五勺を固く

垂れし事ない筈の中に一人、近來こゝへ落込來りし彼の大浦卓三ばかりは、金も體量も糞尿も世間の平均數よりは圖ぬけて頗る多い奴、のそりとして悠々たる體、いかにも此長屋に不相應の男なり、

長屋の奥の總雪隱に向うて、右側の二軒目に相も變らぬ例の熊さン、前夜は運よく一時過まで稼いで今日の米代に驚かねば、今朝はまだ其まゝの煎餅蒲團に鎌首を擡げながら、これも一日の安心に平常よりは落著いたる女房お菊と聲を潛めて私語きぬ、

『ねェ、おい嗅ァ、今日で三日目になるが鄰屋の大將、どうだね、少しやァ鑑定が付いたかい』

『さァ、まだ分らないよ、しかし良人さン、どう見ても賤しくない立派な旦那風で、萬事が大揚で、そして妾等にも高ぶらないで、あの大兵に手輕い愛嬌のある工合なか〳〵捌けた方らしいよ、朝は召上らないやうだが晝と晩の二度は、どッか外へ御飯を喫べに出て、歸ると其まゝ新しい白い毛布を三枚も著て空氣枕に寢てばかり居なさる樣子が猶更分らないよ、いくら考へても良人さン、たゞ生きてるばかりに骨の折れる身分とは見えないさ、結局この長屋に住む筈の人品ぢやァないね』

『そこだ、蟹は甲羅の穴で、この長屋へ落込ンで來る筈の奴ァ、鬼の孫でも蛇の卵子でも軒を竝べて平氣だが、住む筈のねェ人間が不意に壁一重の鄰屋へ用もなく茫然と來て居られちやァ正體の知れるまで何だか氣に懸ッて變な心持だ、大體の根も葉も違ッてるやうだが、あの星影先生で隨分、懲りたからなァ』

『眞實だよ、同じ唐突に引ッ越して來ても、すぐ其場で商賣もンの七味唐辛子を一袋づゝ配り歩く人の方が却ッて心易く、氣を許して交際も出來るからね』

『ハヽヽヽ、朝鮮髯と石作を餅に搗いて其上また御丁寧に燒轉がしたやうな、あの七味唐辛子

屋、どうだい、いづれも樣で素袷一點の寒曝しは珍らしくもねエが、だしぬけに引ッ越して來るや否、女物の仕立直しを尻ひッからげた草鞋穿のまンまで蕎麥の藥味だけを配り歩くたァ、いやに敏捷こく貧乏馴れた惡洒落な野郎だ、ます〳〵この長屋も呵しな奴で妙に繁昌するよ、ハ、、、』

これが此奴の持ッた常病、そも〳〵八軒長屋の出來事には必ず第一番に狼狽出して、加之も飛出す毎に首尾よく仕損じながら、さて懲りもせぬ八卦よい屋の朝鮮髯、また例の痩こけた面相に猿の如き眼を剝出しつゝ、きよろ〳〵として熊公の許へ慌て込みぬ、

『やァ熊さン、いよ〳〵お鄰屋に事ありけりだね、どうも變だよ、をかしいぜ、實は今、長屋の入口へ俥を卸して八字髯の生えた當世風の洋服がね、近來この奥へ大浦卓三といふ人が引ッ越して來た筈、たしかに居られますかと尋ねるから、居るといへば其まゝ這入るべき筈の奴が忽然また俥に飛乘ッて驅出したぜ、え、熊さン、妙ぢやァないか、これ大に仔細なくて叶はンよ、しかし本人に通じたもンだらうか默ッて居た方が宜からうか、ちよいと相談かたゞ〳〵』

きくや否、いつも此奴がと、熊公よりも女房お菊の面白からぬ顏色、

『そろ〳〵また八卦屋さン、お株を持込ンで來たね、良人さン、そンな相談に乘せられては困るよ、例の調子で、ろくな事になりやァ仕ないさ』

『例の調子で、ろくな事とは酷い』

『ぢやァ何か、これまで長久の間に唯の一度でも良人の爲になる事を持込ンで下すッた覺があるの』

『ある無いに拘はらず、お互ひだよ、かうして住めば同じ一棟に繋がッた生物だから、こりやア義理人情、馴染の古い淺いは偖置いて、このまゝの間捨にも出來ないさ、わざ〳〵尋ねて來て其本人が居るといへば其まゝ這入らずに飛出す奴、いづれ曲物に極ッたりだ、ねエ山の、お神さン』

『山の字だけ餘計だよ』

『や、これは失策、時に熊さン、どうしたもンだらう』

熊公おもはず苦笑しながら振返りぬ、

『馴染が淺くッても、それほどの義理人情がありやア聞捨に出來ねエ汝だけ、まづ鄰屋へ駈込ンで御注進するさ、ハヽヽ、しかし今晝飯を喰に出たやうだぜ』

『さアその飯も眼の付けどころだ、そも〳〵この長屋に住ンで居て、あの大きな身體へ自然に備はッた風俗が第一に不相應だよ加之も平氣に澄し込ンで懐手のまゝ、いち〳〵ぬッと外へ喰に出る工合ぢやア、まさか熊さン、ぶッかけの立喰でもあるまいな、して見るとさ、ます〳〵變だぜ、今の尋ねて來た當世風の洋服が、もし身を忍ぶ隱れ家へ窺ひ寄りし敵の間者とすれば、いよ〳〵尋常の落武者ぢやアないよ、どうも萬事の樣子が雜兵の流れ込とは見えない、事と品に依ッては一番、ぐッと力を添へて二度の旗擧さしたいね、浮べば諸共に運の開くこッた、なアに敗れても此方は裸馬に落す荷物もないからなハヽヽ、腹さンざ秣を食ッて鞍でも背負ッて遁戻りやア大出來だ、ハヽヽ』

『おい〳〵、また柄にない謀反氣を出すと、いくら後で臍を嚙ッても無效だぜ、まづ止した方が無事だね、やはり手に馴れた算木筮竹を捻くッて嘘八百の八卦よい屋が分相應だ、馬も馬に依りけりで、そンな痩馬ア出ると直ぐに乘斃されるぜ、ハヽヽ』

『いや熊さん、さう見くびッたもンでなし、いざ鎌倉といへば痩せたりとも拙者、佐野の名馬だ、鄰屋の馬の脚とは違ッてるよ、ハ、、、、、』

人間これなくて渡れぬ衣食住のうち、著るものと食ふものに事缺かねど、聊か仔細あッて今この一蓮托生に住む大浦卓三いづれにか畫飯を終へて歸り來りし體は、なるほど棟割長屋の九尺一間に目立ちて不似合の容貌風采、今しも熊公の許より狼狽出でし朝鮮髯を見るや否、膏ぎッて悠々たる大兵肥滿に案外の愛嬌を浮べぬ、

『春めいて好い日和ですな』

本業の神易にかけては自己が脚下を啄く鷄の雌雄も分らぬ奴なれど、これは尋常の落武者でないと見て取りし朝鮮髯、はッと俄に尻骨の立ちし小腰を屈めて慇懃の挨拶振、

『さやうで御坐います、この分では花も例年よりは早く咲きませう、いや、時に只今、ちよいと實は貴君の方へ伺ひましたが、いづれへか御不在中で』

『そりやア失禮しました、何か御用ですかね』

『いえ別段、しかし先刻、この長屋へ貴君を尋ねて來られた人が御坐いますよ』

『はゝア、どういふ人間ですな』

『三十前後の八字髯を生した、萬事當世風の洋服で、たゞ居らッしやるといふ事だけを聞いて、すぐ其まゝ車で引返した樣子が、どうも變ですから、もし何か貴君の御都合上、お心當りでも御坐いますかと存じまして、へ、、、かうして一棟に住ンで居ります以上は、お剛染の淺い深いに拘はらず、やはり妙なもンで、氣になりましてね、へ、、、』

大浦卓三、小首を傾けて眉を顰むるかと思ひの外、大眼球を細くして四邊かまはぬ無遠慮の

高笑ひ、

『ハヽヽ、來ましたかい、どうせ來る奴ですよ、いや誰といふ事は分りませンがね、さういふ呵しな奴等が、そろ〳〵遣ッて來る筈です、ハヽヽヽしかし御親切の段は有難い、いづれ今後また御厄介をかけるかも知れませンから何分、よろしく願ひますよ、ところで貴君ア易を業となさるさうだが、どうですな、幸ひ一卦この大浦卓三の運命を觀て下さらないか』

『どゝ何う致しまして、恐れ入ります、なアに貴君、實は洒落半分に小遣取を兼ねて、ちよいと淺草の宵闇へ出まするばかりで、迚も貴君方へは、第一また白晝に改まッて顔剛染の方には卦の立たないもンで御坐いますよ、へヽヽヽ』

『能ある鷹は却ッて羽翼を張らぬといふ理由ですかね、ハヽヽそりやア偖置いて御閑暇な時は、をり〳〵お談話に來て下さい、當分この通り用のない暢氣もンですからね』

『是非、是非とも伺ひます、いかゞで御坐いませう、早速ながら今日は拙者も無聊に堪へませン折柄で』

『ぢやア、おいで下さい、と言ッたところで偖お互に同じ九尺一間だ、ハヽヽしかし其うち夕飯時分にでもなれば、どうせ出かけますから御同伴に』

朝鮮髯、こゝぞと附入ッて、ます〳〵慇懃に痩こけたる小腰べこ〳〵、飢ゑたる蟷螂の藝に似たり、

『いへ何、同じ棟割の九尺一間でも剛れた自分の住居と違ッて他樣へ伺へば格別また、氣の轉ずるもので御坐いますよ、加之も年が年中の貧乏神とゞまり在す此うら長屋の名物で、ほろ〳〵の不淨談話を何日も八重垣に閉飽いた耳の穴へ、ばッと不意に天の岩戸の明たや

うな世間の面白い事、承はれば體の養生にもなります次第で、へ、、、、』

八卦よい屋め、こゝに一期の智慧を紋ッて饒舌り立てぬ、

同じ浮世の戰場より落ちて來ても、陣笠を押潰されし雜兵と金鍬形を折られし内兜の大將分とは自然に武者振の相違ありと、毛虫の如く大浦卓三の襟に取付いたる八卦よい屋、ほしやほしやの朝鮮髯を捻りながら俄の追從輕薄、されど流石に何とやら氣恥かしく鄰屋の熊さン夫婦へ憚かりて、思はず聲を潛めぬ、

『どうせ何か、一時の御都合上で、辻も長く此のまゝ居らッしやる筈は御坐いますまいが、せめて貴君方と同じ一棟に住めば緣に繋がる拙者共も自然に運の開ける瑞相で、多年この長屋を遠慮なしに我嗟統の定宿と致した貧乏神も、そろ〳〵薄氣味わるく、今までのやうに落著いて安心は出來ますまいよ、へ、、、、』

骨と皮とに瘦こけて八九貫目あるか無なしの朝鮮髯が空笑ひ、最後の一發も放り得ぬ死際の鰌に等しく、二十貫目に近い大浦卓三が便々たる腹の底より吹出す高笑ひ、寢恍けし虎の嘯くが如し、

『ハ、、、、とンでもない、そりや大變な見當違ひだ、うか〳〵この大浦卓三に緣を繋ぐと折角、開きかけた運も塞がッて、生優しい貧乏神の子分が足溜りの定宿ぐらゐぢやア濟まない七福神の油斷を見澄し三盃酸にして喰ふやうな親分株が屋敷を構へに來る筈だからな、ハッハッハ、、、現に先刻わざ〳〵尋ねて來て其まゝ引ッ返したといふ奴それが、貧乏神の斥候だ、いよ〳〵近日のうち頭領の奴が數多の眷族を連れて押寄せるだらう、どこを見ても同じ九尺一間だから固く戸を閉めて用心しないと、狼狽へて飛込む奴があるかも知れ

ませンぜ、はゝゝゝ』

いかに外貌は大兵なりとて、須磨の浦浪に漂ふ小敦盛のやうな公達生育の落武者と思ひの外、これは坂東一の熊谷を取ッて捻伏せさうな苦勞人の果、あたら追從輕薄を一口に揉潰されて聊か拍子ぬけの朝鮮髯、されど組付いて損のない敵と飽くまで取縋ッて放さぬ覺悟なり、

『へゝゝ、御戯談を、誰が貴君、うけますもンで、これだけは拙者の本業上、たしかに動かない卦が立ッてる筈で御坐います、そも〳〵この長屋へ根の生えるものは必定この長屋相應の貧相を備へて居りますからな、へゝゝゝ』

『さ、そこだ、生涯この長屋相應の貧乏で住終せる人よりも、ぐッと飛放れた大貧乏の骨相を備へてるンだ、論より證據いづれ近日、あらためて事實を御覽に入れよう、時に如何ですな、少し早いやうだが、お差支なくば出かけませうか、その邊を運動かた〴〵夕飯に』

『や、何よりの證據、あらためて拜見いたさずとも、現在それが貴君、貧乏といふもンで御坐いますかね、この長屋に住で運動かた〴〵夕飯を外へ喫べに出るとは、へゝゝゝ拙者も死ぬまでの間に一度、さういふ洒落た面白い事を言ッて他を連れ出すやうになりたいもンで御坐いますよ、へゝゝゝ』

『なアに世の中に生きてる人間だもの、喰はなければ死より外アない、貧乏と喰ふ事は別問題だ、そいつが同一物になッて堪るか、ハゝゝゝ』

名にも身體にも反かぬ男、なか〳〵大きいところあり、

いかな見倒し屋の紙屑買に見せても、棟割の九尺一間にある筈の品物でないと言はるべき大浦卓三が、悠々たる山の如き風采態度、のッしりと二十貫目の大兵を運び出す背後より、こ

れはまた八軒長屋の床下に湧いて出た蟲かと怪まれても、誰一人さうではないと言切らぬ筈の朝鮮髯、ひよこ〳〵と小腰を屈めて從ひ行く體、折して左側の二軒目より表障子の破れ目に差覗きし七味唐辛子の喜助、ちらと見て、ふッと吹出しぬ、

加之も此奴、あくまで貧乏馴れて浮世の底に惡摺れの四十男、いはずともの事は猶更四邊近處へ友呼ぶ大聲あけて喚きたい奴なり、

『こいつァ妙な取合せだ、珍無類、奇妙奇轉烈な圖が動き出した、ハ、、、、しかし落つれば同じ谷川の水だ、かうして一所の窪みへ流れ込んだ以上は雪も氷も雨滴もない筈さ、どうか斯うか時候に合ッた著物を纏ッてる奴も、女物を仕立直した素袷一枚の野郎樣も、高低なしの一列一體に交際たいもンだなァ、面白くもない、見る目が辛いよ、何を食ッたか、全體あの嫌に肥り返ッた、でッかい護謨鞠のやうな奴も奴だが、べこ〳〵後から喰ッ付いて行く唐變木の巢枯た胡摩摺奴が癪に觸るさ、主從なら主從と最初に長屋中へ觸れて置くが宜い、をかしく辯になると外が迷惑だ、ねェ鄰屋の婆さン、さうぢやァないか』

鄰屋は例の業突張お虎婆、得たりと待象ねし亂杭の齒を現はしながら、いよ〳〵輪をかけた惡まれ口、

『なァに喜助さン、あの一軒目はね、ふしぎに正體の分らない妙な奴ばかり住込むよ、先に居た奴は下手な張子の狸へ仙人の生靈が取ッ付いたやうな變てこの奴でさ、學校の教師でも醫者でもないに、どういふもンか頻りに先生々々といはれて居だが、今汝さンの住ンでる家に巢籠りして居た鰕茶の腐り阿魔と乙な事になッてね、空屋で交尾むやら盜賊と間違へられて飛出すやら、いやはや、お話にもならない醜態、實に呵しかッたよ、加之も結句の果は居るに居られず出て仕舞ッて、その女が遁げたとか欺したとかで、奴さン口惜しま

ぎれに木賃宿で首吊往生さ、ハヽヽそ、その先生の跡へ來る奴だもの、引けば引かるゝ自然の因縁で、いくら丈夫に肥ッて居ても、どうせ最後は滿足な死樣をする人間ぢやァあるまいよ、呵しくもないが笑はずに居られない、ハヽヽヽ』

『なるほど、さう聞きやァ長くも無からうから、まァ堪忍して腹の蟲を治めて置かうよ、ねエ、しかしあの八卦屋の胡摩擂め、病ほけた猿のやうに、べこ〳〵と目觸りだな』

『猿は人間に毛が三本足らないだけといふが、ありやァ猿に毛が三本足らない人間でね、ちよいと目觸りのやうだが、なァに能く考へて見ると、あの通り昔から長屋中の宜い御慰さみに出來た奴さ、つまり叩き大工の削り損ッた鉋屑のやうな野郎だ、吹けば飛ぶよ、ハヽハヽヽ』

向側の熊さン夫婦、おもはず顔を見合せながら、眉を顰めて舌鼓を打鳴しぬ、

『おい嚊ァ、あの業突張の鄰屋に生憎また一人、とンだ口の減らねエ野郎が住込ンだもンだ、揃ひも揃ッて小面の憎い事を吐かすぜ』

『眞實だね、お虎婆は固より承知して居るが、あの七味唐辛子屋め、蕎麥の代りに藥味を配ッて歩いた時は、たゞ氣輕に面白おかしい頓狂な人だと思ッて居たにさ、大變な喰はせ物この樣子では、そろ〳〵地金を出しかけるよ』

『いづれ尋常の眞人間ぢやァねエさ、しかし朝鮮髯も困ッた奴だよ、性來にもねエ謀反氣を出しやァがッて、今に見ろ、きッと瘦馬め跛蹇にでもなッて歸るのが落著だよ、根が人の惡い奴でねエンだからな』

『たゞ大變だ、熊さン大變だ〳〵』

長屋の入口より慌て込ンで、きやッ〳〵と叫ぶ朝鮮髯の聲に、熊公おもはず女房お菊を振返りぬ、

『そら來た、いはねエ事か八卦よい屋奴いよ〳〵何か失策を遣らかしたぜ』

『面倒だから戸を閉めてお仕舞よ、蒼蠅はね』

はや蝗の如く飛込來る幸運齎、自己が頤を兩手に確と押へて半泣の體なり、

『どう仕たい痩馬、鄰屋の大將を乘ッけて出た樣子だが、不意に尻ッ尾の毛でも引ン抜かれたンぢやアねエか』

『尻ッ尾の毛どころか、頤の毛だ、拙者この髯を抜かれては今夜から本業の看板がないよ熊さン、實は生命よりも大切な髯だ、どうしよう、ざょ殘念だ、口惜しくッてならない、居ても起ッても堪らないよ堪忍が出來ないよ』

『ハヽヽヽそいつア大變だ、名物の朝鮮髯を抜かれたンだな、どういふ理由か知らねエが鄰屋の大將も隨分、ふざけ過ぎた酷い惡戯をするよ』

『いや何熊さン、鄰屋の大將でないよ、その相手が、そょ其奴が　いよ〳〵以て猶更無念骨髓に徹する奴だ』

『全體どこの誰だい、兎も角も手を放して見せな、どンな工合に引ン抜かれたンだ、おや、何ともねエぜ、ほしや〳〵と元の通りに生えてるぜ』

『生えてる、さういふ筈はない、皆悉まで引ン抜かれないが、たしかに半分ぐらゐ拐り取られたよ、その證據には今まだ此通り、ぴり〳〵と痛くッて堪らない、畜生、この大事な髯を摑ンで凡そ一二間も引摺りやアがッたからな』

『ハヽヽまア落著いて話すが宜い、たとひ半分でも殘ッて居りやア看版に差支はねエよ』

『ある無いは兎も角、實ァ熊さん、大將の御供を申してね、上野まで行ッたのさ、上野まで、加之も拙者こょに十餘年來、絶えて久しい會席料理の御馳走、無論、酒も飛切の上等だよ、いやはや堪ッたもンでない、ほッと氣の遠くなるまで夢中に戴いて、そこを出ると大將は途中から他へ廻られた、あとに拙者一人いよ〳〵御氣嫌の體で、ぶら〳〵本願寺の裏手へ差かょると熊さン大變、例の廂髪だ、あの瀬田とよ子の畜生が二十六七の書生と手を引合ンばかりに遣ッて來るぢやァないか畜生』

『えッ、阿魔、ぢやァ遠くもねエ穴に居やァがるンだな、よしうぬッ』

『それも熊さン、あッと驚いて遁出すかと思やァ、呆れたもンだよ、まさか拙者を見忘れる筈もなからうに、洒ァ〳〵と向ッて來るぢやァないか』

『いけ太エ畜生だな、よく滿足に歩いて來やァがッたよ

『やッたぜ、やらいでか加之も久しぶりに醉ッた勢ひだ、摺れ違ひに飛付いて横ッ面を一撃、やッた事は熊さン、やッたンだがね、その連の書生め、けしからン強い奴でね』

『ちよッ、鈍癡だなァ、考へて見ろ、死際の肺病人か小兒の外ァ、凡そ世の中に腕づくで汝の勝てる相手があるかね、あまり智慧が無さ過ぎるよ、分相應の役目に何故、そッと這込む穴を見届けた上、乃公に知らしてくれねエンだ、阿魔の横ッ面は宜いが忽然その場で、その書生ッほに小ッ酷く遣られたンだらう、大切な髯まで拐られたンだな』

『熊さン殘念だ』

『遲いよ』

悠々たる風采態度に似合はず圓轉滑脫の調子を帶びて、わざと作らぬうちに案外の世辭愛嬌

を含める大浦卓三、はや日は暮れて夜に入りし九時ごろ、のッそりと例の大兵肥満を運びながら暫時の浮世こゝを假寢の八軒長屋へ歸り來りぬ、

加之も元來どこやらに一點の洒落氣を帶びし男、其まゝ自己が塒へ這込むも面白からずとや、小聲に朝鮮髯の宿を差覗きぬ、

『未歸かね、お不在かね』

豆ランプ一個もない眞黑闇の中より蟹の如く、ごそ〳〵と這出す音、

『や、お歸りなさい』

『ハヽア、居るンだな』

『居りますとも、久しぶりに戴いた折角の御馳走を、些少な見料に饒舌立てゝ腹を減しちやア差引勘定、第一また貴君へも濟まないと存じて、今夜ア淺草へも出ず、じッと靜に宵から此通り神妙に寢て居りますよ』

『なるほど、こいつァ一理あるね、なか〳〵妙な工合に經濟を考へてるよ』

『そりやァ貴君、その位な事は心掛けて居りますよ、毎日あゝいふ御馳走に逢へば、いつも此通り宵から神妙に寢込ンで淺草へは出ませンね』

『ハヽ、一本やられたわい、しかし斯う、まッ闇な中で寢て居でも不自由だらうに』

『いや、これまた經濟の一端、營業上の淺草では惜氣もなく神易の弓張提燈を照しますが、遲く歸ッて寢るより外に用のない身ですもの、火の氣は入りませンよ、もし萬一の事があれば直ぐに飛出す覺悟で、をり〳〵豆ランプの油が無くなる奴よりは結句、氣樂で便利で、しかし貴君に此まゝでは失禮、只今その提灯を點けます、ちよいと、お待ち下さい、はてなこの邊にマッチがあッた筈だ』

『なァに別段、談話もないンだ、其まゝ寢なさい』

『いや是非、お這入を願ひたい、まだ九時か十時、實は身體を横に致しましただけで、大きな眼を剝いて居りますよ、それとも拙者お伺ひ申して貴君の方のランプを點けませうか、お手が油臭くなりますぜ大將、大將』

いへども大浦卓三、はや無言のまゝ過去りし數〻不意に向側の石作、

『うまく遣るね』

『や、石作さンかね、どうですな、この二三日は駈違ッて逢はないが、よほど外に面白い口を見付けたやうだね』

『おッと、算木の置きどころが違ッたよ、まご〳〵外へばかり飛歩くからね、却ッて燈臺の下暗しで手近の大油斷、あゝいふ甘味い口の内にあるのを知らなかッた、今の樣子ぢやア隨分物になるらしいね、一人占領は酷いよ』

『しッ、聲が大きい、中間一軒だ』

『兎も角も神易に火を點けなさい、幸ひマッチは持ッてるよ』

『それに及ばない、まッ闇でも談話は出來るさ、ハヽヽヽ』

『現金だね』

『お互樣だ』

折しも筋向ふの西川要五郎、ぱッと俄に豆ランプを差出しぬ、

『なァに點火ぐらゐは僕が資本金を入れるよ』

八軒長屋前編

晝飯と夕飯を喰ひに出る外は、さらに用のない大浦卓三、まして朝飯を喰ねば其まゝ九時過

まで起きもせず、この八軒長屋には猶更目立ちし眞白の大毛布三枚を打被ッて新しき空氣枕に大の字形の高鼾、いよ〳〵尋常の落武者でなし、

折しも門口とて雨戸さへなき破障子一重の外より、昨日わざ〳〵訪來て忽然また引ッ返せし八字髭、年輩三十前後の仔細らしき當世男と四十餘の一癖あるべき商人體、そッと差覗きながら互に顔を見合せて今更呆れ顔なり、

『大浦さン、大浦さン、まだ御睡眠ですかね大浦さン』

實は寢入らぬ本人、わざと二聲三聲を呼ばせし後、やう〳〵太き首骨を擡げぬ、

『誰だ誰です』

『坂上と、黒川です』

『や、坂上さンか、こりやア失禮した、むゝ黒川さンも御同伴で、さア御遠慮なく其まゝ、しかし、こンな窮巷を、よく分りましたね』

靜に白毛布を丸めて片隅へ押遣りつゝ、自己が五體を持餘すが如く身を起して、のそりと立てば、さらぬも低き棟割長屋の天井に二三寸の大男、

『ハ、、、御覽の通り、うッかり立つ事も出來ませン、屈ンで居ても尋常外れの身體ですから滿足に手足を伸されませンよ、だが今日の大浦卓三、こゝばかりぢやアない、どンな廣い天地へ出たッて頭も手足も閊へる筈で、身を縮めて小さくなるのが當然でせうよ、ハ、、、』

坂上といふ四十男、俄に眼を光らしぬ、

『大浦さン、兎も角も今日の我々は、これまでの御交際と違ッて、たゞ暢氣に貴君の洒脫したところばかり伺ッて居れませンよ』

黒川といふ八字髯の三十男、

『どうか大浦さン、その御覺悟で』

大浦卓三、いよ〳〵悠々たる體に滿面の微笑を浮べぬ、

『や、無論その邊は萬々、承知いたして居りますよ、わざ〳〵御兩人も揃ッて此、この見苦しい九尺一間の裏長屋へ御遊興かた〴〵入らッしやる筈がない、しかし、ちよッと顏を洗ッて來ますから、どうか暫時、寢恍けるな面を洗ッて來いとは眞實、かういふ時のこッてせう、ハッハッハ、、、』

鍵もかけざる鞄の口を手輕く開けて、旅行用の化粧道具より齒磨と楊子を取出し、手拭を提げながら立出づれば、わづか井戸端へ三歩か四足の其間に待受けし朝鮮髯きよろ〳〵と眼ばかり痩こけし額越に働かして、敵を恐るゝ伏勢の容態、四邊を憚かりつゝ聲を潛めぬ、

『昨日の八字髯ですな、ぬッと唐突に默ッて這入ッたもンですから、少しも存じませンで、もし何か御用が御坐いますりやア及ばずながら』

大浦卓三、ます〳〵平氣に澄し込ンで無遠慮の高笑、

『なァに、どうせ押寄せて來る人だ、知らして貰ッたところで一方口だから遁げられないよハ、、、』

二十貫目に餘る大兵肥滿、たゞ一人でさへ、うか〳〵慌てゝ動かば手足の食出る九尺一間の破疊三枚、加之も三尺の吊戸棚と一番形の大鞄と俄に丸めし白毛布の山とに塞がれて、殆ど一疊半に二人の男が押寄せつゝ、三人こゝに肩肱を張りながら膝と膝との談判、痩猫一疋の自由に這込むところもなし、

『大浦さン、この坂上と貴君とは年來の取引上、かういふ事で改まッて御目にかゝるのは嫌

ですがね、まして折角かういふ穴へ這入られたところまで押掛けて來るは、いかにも嫌で堪りませンがね、事實、かうなッた上は致方もなし、第一また今度の債權者中この坂上が金高に於ても年輩に於ても、まづ筆頭の部ですから已むを得ず總代に選ばれまして、勿論、全權を委任されて來ましたから、その御覺悟で、宜しいかね、しかし相手が尋常の相手と違ッて大浦さンだ、隨分これまで幾度も御手腕を拜見してる我々風情が、たゞ惘然と馬鹿正直に伺ッても無效だといふ一同の相談上、つまらない枝葉に渡らないため、幸ひ今度の一件に關係の黑川さンを同道しました理由でね』

『今、坂上さンの言はれる通りで、この黑川が辯護士といふ上からは、既に先々月あの時に行うたのみで、以來、實は貴君とも知らない間ではなし、どうか相互の中間に立ッて出來得るかぎり、圓滿に局を結びたいと思ッて居ましたのさ、それに大浦さン、あのまゝ默ッて不意に飛出すとは酷い、甚だ宜しくない、あまり無責任だ、勿論、僕の方へは昨日の朝こゝに居られるといふ端書は來たにしても、その間が殆ど一月の餘ですからね、しかし執達吏の方の競賣期日には、まだ五日の延期猶豫になッて居るを幸ひ、今日の黑川は貴君に對する好意上、この坂上さンと同道して來ました理由です、もし差押へたものが競賣の結果、その債權額に餘るとか但し相當するとかの貴君が、不意に所在不明といへば却ッて人格の點を面白く感じますが、現在、二萬圓內外も足らないといふ事は誰の眼にも分ッてる貴君として、これでは頗る男らしくない、妙に遁げたと思はれても仕方ないンですからな、しかし他の人と違ッて、あくまで貴君を信じて居る黑川です、また債權者の諸氏に於ても、十二三萬圓で此まゝ斃るべき貴君とは思ッて居ませンよ、さらに一歩を進めていへば、十二三萬圓で貴君を倒して仕舞ッては實に惜しいといふ點がありますから、今日も斯うして

坂上さン同道で伺ッたのです、考へて御覽なさい、一時に四十日間も延期したのは、よほど債權者が貴君を買ッた證據ですぜ、ところが唐突に一個月の餘も所在不明で、その四十日も殆ど餘日なく、もはや競賣に五日の今日、全體どういふ御覺悟です、この黑川は自分の託された職責上、已むを得ない期日に至るまで決して法律を荷ぎ出しませンから、貴君も德義上より打明けた御決心を承はりたいです、大浦さン、如何ですな』

大浦卓三は例に依ッて例の悠々たる態度、此まゝ大地に減り込むとも更に驚かぬ顏色、微笑を浮べて首肯きぬ』

『坂上さンといひ黑川さンといひ、段々の御好意は有難く存じます、その有難い御好意に對して猶更濟ないこッてすが、少々ばかり饒舌らして戴きたい、あのまゝ不意に飛出して妻子も連れず只一人、この裏長屋へ落武者となッたには聊か理由のある事です、や、障子の破れ目から覗くのは八卦屋さンだね、氣の毒だが其邊で何か菓子と、言ッても茶器がないから不可、さうだ、幸ひ林檎でも買ッて貰ひたい』

鞄の口を開けて紙入を取出しながら、五圓紙幣一枚を抓み出しぬ、

『こりやァ差押への外ですよ、財産隱匿の罪に問はれては困る、ハヽヽヽ』

債權者は七人、負債の金高は合計十二萬圓餘、その總代に押寄せし坂上と辯護士の黑川を相手にして、今この八軒長屋の九尺一間に悠々たる大浦卓三、なるほど敗れても落ちても雜兵葉武者にあらぬ男なり、

『坂上さン、黑川さン、こりやァ貴君方に對して今更未練らしい申譯めいた理窟を竝べるンではない、もしまた哀訴歎願する氣でもあれば、あのまゝ無斷に飛出して猶更債權者の感情を害しませン、さらに事實の成行からいへば論も糸瓜もないこッた、當然の義務を認

めて法律上、神妙に差押へられたものを、その期日に至ッて權利者のために競賣せられるンだ、また見積ッて二萬圓内外、足らないといふ御言葉もあるが、そりやァ、さうでせう、まづ世間の例として、どうせ數人が加入し合ッた競賣の結果は、いづれ足らないもンですよ、足ると見れば強ち差押へもすまいし、また餘れば差押へられもしませンさ、よし債權額以上あるにしても、既に公然と強制の文字を冠せる執達吏の手にかゝれば必ず足らないに極ッたもンだ、つまり押へる奴も馬鹿、押へられる奴は其上の馬鹿、お互に眼の見えた恰悧な人間の喧嘩でないね、加之も商人としては實に算盤勘定を知らない大馬鹿の擱み合ひだ苟くも十何萬圓としては益々その大馬鹿に輪が掛ッて、雙方いかにも働のない思慮のない白癡の骨頂が明かに證明せられますね、ハヽヽヽところで坂上さン、勿論、黒川さンにも申上げるが、この大浦卓三は自分相應の決心して居ますよ』

『馬鹿な講釋は偖置いて、その決心を伺ひませう、ねエ黒川さン』

『さやう、その決心に依ッて、致方がないから斷然たる處置を取りませう、大浦さン全體どういふ決心です』

『ハヽヽヽ、金錢の多少よりも信用と手腕で世に立ッべき商人へ對して突然、强制執行をした以上は、もはや既に斷然たる處置を取ッて居なさるンぢやァないか、致方がないからといふ、その致方のないのは此方の事ですよ、ハヽヽヽ、まづ期日に至ッて神妙に謹ンで相違なく競賣せられる決心ですね、この大浦卓三の一身としては目的の絶頂に上り得ない山の半腹より轉げ落ちたも同然、聊か殘念ですが、つまり京橋の通街に一軒の清韓貿易商店が無くなれば宜いンだ、それで事が濟むンですよ、無論、競賣の結果、二萬圓でも三萬圓でも不足した分は、あらためて證書に仕直し立派に債務をうけますよ、多少の根さへあればまた、

自然の春に逢うて芽の吹き次第、すぐまた遺憾なく早速寄ッて集ッて拐り取りに來なさい、せめて四十萬とか五十萬とか人に聞かれても金らしい金なら隨分、みごとに踏倒す工夫もして見るが、なァに二萬や三萬の端た金で生涯の男を潰しちゐァ其方より此方の差引勘定が合はないから、御安心なさい、倒せといはれても倒しませンぜ、ハヽヽヽついでに貴君方へ一言、ちよいと通じて置きますがね、大浦卓三、あのまゝ不意に飛出して殆ど一月の間、この裏長屋へ閉籠ッて居たのは貴君方に對する借金のためでない、そりやァ差押への成行と結果が自然に解決を與へてくれる筈だから、一切放任して仕舞ッて、實ァ自分の前途、あらためて無一文の丸裸より再び這出すべき將來の方針を考へるため、どうせ仕樣のない面倒な蒼蠅い事を差支のない時日内に避けたンですよ、しかし、どうか斯うか、その方針も定まり、また一方の時日も迫ッて來たから昨日の朝、始めて黑川さンへ所在の端書を出しましたのさ、ハヽヽヽ時に先刻から貴君方が頻りに好意々々といはれる、その好意なるもの、もし果して實際の善後策を取ッて下さるといふ好意なら、今の負債に對して如何なる好意も有難くない、たとひ負債額を三分の一に仕て貰ッても嬉しくない、どうです、これまでの借金は借金と仕て置いてさ、この大浦卓三へ改めて十萬圓ほど貸して下さらないか、つまり痩せたところを叩いて取るよりも滋養物を與へて肥えたところを絞り取る工夫ですぜ、ハッハッハヽヽヽヽヽ』

腹の底の大息、ぷッと吹出して、天井を仰ぎながらの高笑ひ、長屋中に響き渡りぬ、

『どうですい、西川さン』

『や、八卦屋さン、近ごろ君の取入ッた御大將の館に今朝、何だか、事があッたやうですな』

『へ、、、事も事に依りけりさ、西川さん以後は一切、お氣の毒だが少々、言葉を謹んで貰ひたいね』

『おや急に改まッて、妙に角を立てるぢやァないか』

『立てるよ、立てずに居れない場合だ、うか〳〵今までの調子で遣られちやァ甚だ困る』

『何故、何のこッた』

『なぜも畦も畑もあるもンか、憚かりながら京橋の中央だ、仙人の寝言を聽くやうな雲や霞に隔たッた九州の空でないンだからな』

『變な事を言出すね』

『何が變だよ西川さん、たゞ口でいふ汝さんの十萬圓とは違ッてるぜ、金山か土山か木の山か知らないが隨分、長らくの間この耳へ蒼蠅く聞飽きた汝さんの十萬二十萬は全體、さても其後さるほどに、どうなりましたい、え、西川さん、もしまだ影も形も無きやァ今後いくら口から出かゝッても、ぐッと腹の底へ呑込むか奥歯で嚙殺すか、兎も角と差控へた方が宜からう、いよ〳〵この長屋に本物の十何萬圓が居らッしやるンだからね、大浦商會といふ清韓貿易の御主人だ、この朝鮮髯と淺からぬ交際も自然の因緣だ、ハ、、、恐れ多いが、そッと聞かしたかッたね、その十何萬圓の借金取が辯護士を連れて押掛けた奴を、鼻息で吹飛した大將の勢ひ、迚も凡人業ぢやァないよ、せめて五十萬圓ぐらゐなら美事に踏倒してやるが、それッぱかりの目腐れ金、きれいに拂ッてやるから取ッて仕舞へとは西川さン、どうだい』

『ふむン』

『ふむンで濟むかね、も少し何とか感心の仕樣があッたもンぢやァないか、や、ちよいと鄙

星の石作さン、何、不在、殘念だな、あの石作また何のため、こンな日に猥狽へて出歩くンだらう、つまらない人間だよ』

折しも歸り來りし熊公、おもはず歩を停めて差覗きぬ、

『八卦よい屋め、また何か喉咽笛を鳴してるな』

『やァ熊さン、遲かッたよ、なぜ早く歸らないンだ、この幸運齎、事に依ると今夜から淺草へ出ないかも知れないよ、かの御大將は正しく龍頭の金鍬形に緋縅の大鎧だ、ハ、、、疑はしくば細君に聞て見るが宜い、壁一重で手に取る如く今朝の一件を知ッてる筈だからね』

『そいつァ豪氣な有卦に入ッたよ、しかし、いよ〳〵さういふ大將とすりやァ、猶更のこッた、うぬが看板髯のあるか無いかも分らず兩手で頤を押へて泣込むやうな汝ぢやァ、まさかの御用に立つめエぜ』

『いや何、あの時は久しぶりの酒に醉ッて居たからさ、大丈夫、これでも眞面目に使へば天晴れ物の役に立つべき男に出來てるよ、同じ長屋中でも別して心易く氣の合ッた熊さンだ、必ず力になるよ』

『ハ、、、有難エな、朝鮮髯が八卦よい屋を廢めて熊が辻俥に出なくなりやァ、この長屋の入口に冠木門が建つだらう、ハ、、、』

一日の汗水といへど、浮世の辻待に轅棒を握る熊さン、その汗水も運よく客あればこそ、なくば水鼻に空腹の境涯、おのが脛を飛して稼ぐよりは今日も貧乏神の足早に追拔かれて、やう〳〵三十錢あるか無しの財布を拋出しぬ、

『おい嚊ァ、それだけだい』

良人に連添ふ縁よりも貧に連添ふ縁の深い女房、さりとては泥溝板を跳返す裏長屋に名物の喚き聲もなし、

『なァに良人さン、幸ひ晝飯の殘餘で、どうか斯うか妾の分はあるからさ、ちよいと二合ばかり買ッて來ませう、氣の毒だよ、この四五日は大旱で一雫も、お潤澤がないからねェ』

『こン畜生、また妙な事を吐しやァがるぜ、考へて見ろい、うぬばかりに足らねェ冷飯を掻ッ喰はして、この乃公が傍で、小熱い酒を飲めるけェ』

『だから妾が平常に、いふンだよ、内職にマッチの函でも張るか楊子でも削らうかとさ、それに良人さン、それもさせないンだらう、どこの世界に辻待の鼻ァが手を空けて惘然してるものがあるかね、外聞の悪い、せめて三度々々、滿足に炊事の用でもありやァ兎も角』

『べらぼうめ、三度の飯を滿足に炊きたけりやァ、離縁を遣るからな、おさンどンにでも出ろい、この貧乏ァ今更始まッた根の淺エ初心な貧乏ぢやァねェぞ、前世からの深い約束だ、第一また鼻ァに内職さすくれェなら髪結か産婆の亭主にでもなッて懐手で暮さァ、ぐづぐづいはずに畜生、それンだけの米を買ッて來やァがれ』

『ホ、、、色男だね、妾は御飯炊に出られても、良人さンを遊ばして置く髪結や産婆さンは無からうよ、ホ、、、』

『ハ、、、なるほど、さう聞いて見ると少々覺束ねェやうだな、ぢやァ汝も飯炊に出さず乃公も當分まづ色男にならず、この錢で何か暖けェものを喰はうよ、ハ、、、』

『何、聞いてから覺束ないもンか、聞かなくッても確實だよ』

『念を押すない』

『いえ、かういふ時に念を押して置かないと間違が出來るよ』

『ハヽヽヽどうか生涯に一度、そンな間違に出喰したいもンだ』

『しかし良人さン、世の中は廣いからね、さう諦めなくッても宜いよ、まだ好奇心な茶人の髪結や產婆さンが、ないにも限らないさ、ホヽヽヽ』

『馬鹿にするない』

壁越の鄰屋より大浦卓三、例の音太き聲に床板も響くばかりの高笑ひ、

『ハッハッハヽヽヽ面白い夫婦だな、聞いて居ても心持が宜いよ、どうです、失禮だが今夜、一杯さしあげたいね、實は淋しくッて困ッてるンだ』

熊さン思はず振返りて、見えねど頻りに會釋しながら、自己が額を叩きぬ、

『とンだ事を旦那、お聞かせ申しまして濟みません、どうも下司ァ仕樣のねエもンですよ、こン畜生、だから靜に仕ろといふンだい』

『細君に小言は入らないよ、ハヽヽヽところで、どッかへ出かけても宜いが、こゝで飲む方が洒落てるだらう、御苦勞だが、萬事、整へて來て貰ひたい』

黑ビール三本に大林檎五個と一升德利に鮪の刺身一皿を携へながら、熊さン勢ひ込ンで歸り來れば、待受けし大浦卓三、醉はぬ前より手を拍ッて滿面の微笑を漏しぬ、

『さァ、ビールと林檎は此方だ、其方は飲めるだけ飲むが宜い、その一升に限らないよ、看も何故それンばかり取ッて來たンだ、細君の分が無いぢやァないか』

『なァに旦那、勿體ねェ、これで結構でさァね、總體で二圓と五錢ですから、五圓で二圓と九十五錢お剩餘を』

『いけないよ、細君にも何か取ッて來なくッては、よく出來た細君だ、まァ剩餘は其まゝに

仕て置くさ』

熊さン眼を剝いて俄の大聲、

『やい嘗ア、なよ何をしてやアがるンだい、この罰ッあたり女ぐづ〳〵すると叩き擲るぞッ』

大浦卓三、二十貫目の大兵を後ろ手に反返ッての高笑ひ、

『ハッハ、、、こりやア酷い』

さらぬも出かけし女房、慌てよ表障子の閾際に小腰を屈めながら、そッと片寄りつよ身を縮めての挨拶、

『とンだ御馳走さまで、まア恐れ入りました事、いえもう貴君、かやうな業體を致して居るもンで御坐いますから、つい御酒を戴くと何某樣の前でも、ホ、、、いくら旦那が飲めと仰しやッても良人さンまた圖に乘ッて、うか〳〵過ぎちやア不可よ、をかしな調子にならないい前、早く御免を蒙ッてね』

『ハ、、、大切な御亭主を二三時間、ちよいと借りるよ』

『どうせ手前にあッても用の足りない、まことに粗末な亭主で御坐いますから、お貸し申す事は此まよ生涯でも、いッそ差上げた方が助かりますが、すぐ御小言を頂戴するに極ッて居りますよ、ホ、、、そろ〳〵妙な醉工合になりかけましたら、御遠慮なく御叱り遊ばして』

また身を縮めて其まよ立去る姿を、大浦卓三、思はず見送りて猶更興に入りし體、

『自然と愛嬌のある氣輕な世話女房になッてるよ、好い細君を持ッて幸福だ、大事に仕ないと不可よ』

『じよ戯談を、旦那、腐れ縁で今更仕樣がねエから堪忍して居ますもンの、幸福といやア餓

鬼を放出さねエのみのこッてすよ、あれで旦那、世間普通に滿足な女を見習ッて、もし生意氣で子でも產出しやァがッたら、それこそ無事ァ置けねエ阿魔でさァね』

『こりやァ驚いた、何と挨拶して宜いか分らないね、外に不足もあるが子を產ンだから仕樣がないと、いふのが世間普通の正當だぜ、ハ、、、しかし面白いところがあるよ、かういふ夫婦で急に言葉が改まッたり、いやに尋常めいちやァ却ッて不祥だ、いつまでも末長く其まゝで遣ッて貰ひたい、どうも當時は口先ばかり綺麗で腸の腐ッた奴が多いから困るよ、ハ、、さァ飲ンだ〳〵』

いち〳〵ランプに石油を注すも面倒なりと洋蠟を舶來の手燭に立てゝ、旅行用のコップもナイフも鞄の中より取出しながら黑ビールに林檎の下物、人間が大浦卓三、いかにしても八軒長屋の九尺一間に不相應なれど、一升德利の口より湯呑茶碗に注込ンで、鮪の刺身に舌鼓を打鳴す熊公、これがこの境涯にあるべき極樂の絕頂、月に一度は佇置いて年に幾度といふ手柄話の種なり、

『旦那、世の中といふものァ段々で、人間の出來工合にも、いろ〳〵あるもンで御坐いますなァ』

『むづかしい事を言出したね』

『だッて、さうぢやァありませンか、失禮ながら旦那も、わッしも同じ人間ですぜ、それに何故、かう手荒く遣ッてるンでせう、第一まァ早い談話が現在これですからなァ、二合も覺束ねエ豆ランプ一個の石油が、をり〳〵切れて無くなる眞ッ闇な中で空腹を堪忍する人間と、まッ白な西洋蠟燭を雪殼のやうに燃し立てゝさ、掘抜井戸の底も知れねエ奴に酒を下すッて平氣な人間と、吝な事をいふやうですか旦那、その林檎が一個で八錢たァ驚き

ましたね、五個で五八の四貫だ、チャン〳〵の交らない日本米が二升ですよ』

『おい〳〵、つまらない事を言出しちやァ困る』

『いえさ、戴いた酒に醉ッて卷くンぢやァないンですが、どうも不思議だ、變だと思ッたところで旦那ァ、やはり旦那だ、ね、申上げて善いか惡いかァ存じませンが、曩ァに聞きましたよ、大層な御身分で、この熊なンかァ砂利の數でも數へきれねェお金のこッて暫時、かういふ、うす汚ねエ裏長屋へ洒落に來て居らッしやるンださうで』

『ハ、、、定めて聞いたらうあょいふ念の入ッた大貧乏でね、家は差押へられる、妻子は他へ預ける、たゞ身體だけ、やッと無事に遁出して來たのさ、どうして洒落に來るもンかね、實は大心配で、手も足も出ない苦しまぎれに、ぼッとして來たのさ、ハ、、、』

『さ、そこですッて旦那、一升の樽ァ、どこまでも一升ですから敵手の指頭で自由にされますがね、同じ金を借りても旦那のやうに、いよ〳〵何百石となりァ樽も樽、梯子を懸けて上り下する酒造家の大桶でさァね、その大桶の箍が少々ぐれエ弛ンだッて、二合半樽に量りッきりの野郎たァ違ッて、桶の空だけでも大した價値だ、よし底から漏ッて流れ出したところが、その上澄を掬ッても小賣酒屋の一身代は確實だ、また自棄で空桶を横に轉がして、いよ〳〵これだといふ空虛を見せるにしても立派だ、大變な人數で手が掛りませう、もし旦那、それが熊なンかの身分として御覽なせェ、貸す奴もねェが、萬一うまく借りたところで、わづか二兩か三兩の借金取に脚の爪頭で踏ンだり蹴たり、さンざ酷いめに逢ッた結句の果、いはゞ弄り殺しでさァね、二度と再び此世へ生きて出られませンからなァ、ハ、、、、同じ羽があッても鷹と糞蠅だ』

『なか〳〵面白い事をいふね、しかし、籠の弛ンだぐらゐなら、締直しも出來るし、また敵

が來りやア梯子を取外して、たとひ半分は水を張ッても酒だ、こりやア酒だと一番、おどかして動かない工夫もあるがね、その箍が俄に彈ぜて仕舞ッて、ばら〳〵に桶が解けたンだから無效だ、ハヽヽヽ』

『ヘエ、一旦、さう解けて仕舞ッた桶は旦那、組直せないもンですか、解けたッて寄せ合ッた板が離れた理由で、いち〳〵木地が腐ッたンぢやア御坐いますめエ』

『や、ます〳〵面白いぜ、なるほど、桶に組合した板は離れて中の酒は流して仕舞ッたが、それに就て實は其、その板地を元の桶に組立てる工夫最中だ、木地が腐らないとは有難い、身に取ッて氣持の善い辻占だ、や、辻占といやア、あの八卦屋、ハヽヽヽ、ありやア恍けてるね、いふ事の仔細らしくッて少しも本人に仔細らしくないところが妙だ、をかしい人間だよ、ハヽヽヽ』

『お言葉に付くンぢやア御坐いませンが、彼奴も旦那、どうか呼ンでやッて下せエな、あれでも根に惡氣のねエ奴ですよ、第一この熊よりも前に御酒を戴いた事のある奴ですから、かういふ時に一人占は可哀さうです、彼奴、きッと恨ンで泣きますよ、ハヽヽヽ』

大浦卓三、おもはず首肯いて、我手に持てる黑ビールを一口に乾しながら、そのコップを差出しぬ、

『辻俥を曳かすには惜しく出來てるよ、さアこれで飲ンだ』

年ごろ二十七八の丸髷、小荒き大島紬に黑繻子の丸帶、同じ大島ながら風通めきし變り縞の羽織、加之も身に馴れて一切これが常著の風情、くッきりと色白の細面の目鼻立の冴渡りし美人まづ往來の絶間なき萬人の巷にも一日に一人あるか無しかと思はるゝ背後より、ふッく

りとせし十八九の高島田、偖また一段すぐれて水際の立ちし娘、これも常著の銘仙に半襟かけて、聊か流行に後れたれど、晴の帶でもないだけに猶更床しき紫地の小柳縮子、さりとて目立たぬ襦袢の奥まで一點の木綿氣なき自然の柔かさ、どこやら似たる顏貌は問はずともに姉妹ながら、その姉を凌いで天の生せる名花一輪、うか〳〵歩けば此まゝ寫眞盗賊に撮られて、文字の内容よりも當時これなくては賣れぬといふ文學雜誌の口繪に偸まれさうなり、いづこに俥を待たせしか、わざと姉妹ともに足早の歩調、八軒長屋の入口に立停りながら、はッと思はず今更の顏を見合せつゝ、また頻りに四邊を振返りぬ、

『あら姉さん、こゝですの、間違ッては居ますまいか、誰か連れて來れば宜う御坐いましたねエ』

『こゝですよ、こゝだといふ事を委しく書いてあッたから、しかし、ちよいと聞いて見ませう』

『あら姉さん、すた〳〵一人で奥へ這入ッて仕舞ッては嫌ですよ』

『ホヽヽ、氣の弱い女だね』

『だッて妾』

『そンな事を言ッて、姉壻に濟みますかね、平常とは違ひますよ』

妹を外に置いて、そッと入りし左側は慾の外に眼のない石作なれど、生憎く右の表障子この中の本尊は例の色狂者、優しくいへば自己が師匠の女房にさへ手を握ッて長煙管の極印うたるゝ奴、わけて此ごろは女に對つて病犬よりも危い花野露雄なり、

『御免下さいまし、失禮ながら、ものを伺ひたう御坐いますが』

折しも肱枕に兩脚を伸して寢轉びつゝ、これを立身出世の虎の巻と心得て爲永春水の梅暦に夢が夢中の露雄、一つ二つ背骨を喰はしても氣の付かぬ奴ながら、恐ろしや女の一聲は忽ち

五臓六腑に沁渡ッて電氣作用に等しく、はッと振返り、そッと差覗き、ごそ〳〵と這出して、恥かし氣もなく丹次郎これにありとの面、表障子を引開くれば米八を上品にせし女振一目みるや否、はや既に臘味噌を掻亂されて度を失ひぬ、

『はてね、お見受け申したやうだが、つい數の多い中ですから』

『ホ、、、いえ、さやうでは御坐いませン此お長屋に大浦といふ、ものが居ります筈でまるりましたが』

『は、なるほど、大浦さン、は、居られますよ、さやう〳〵この奥です』

『奥の、どの邊で御坐いませう』

『お待ちなさい、は、只今、大浦さン、よろしい、大浦さン』

其六まよ飛降りて下駄も忘れながら、また振返れば丸髷の背後に一人、お蝶を現出の娘が會釋の美容に、あはれや色狂者、ぽッと上氣せあがりぬ、

『まア兎も角も、お掛けなさい大浦さン居るか居ないか、見て來てあけますから、さア御遠慮なく』

鄰屋より不意に飛出したる朝鮮髯、狼狽へし花野露雄を横合より突倒しぬ、

『どうか貴女方、其奴に構はず此方へ、拙者御案内』

姉妹二人の美人を大浦卓三の塒へ送り屆けて、ほしや〳〵の朝鮮髯を捻りながら、まづ今日の手柄顔に立出づれば、突飛されし色狂者、おのれの自由の女でもないに掌中の珠玉を奪はれし如く、眼を剝いて怨恨の喧嘩腰に待受けぬ、

小男なれど、いざ摑み合となれば二十三四の相手、まして女の事には前途自棄の執念深い奴に、ひよろ〳〵の朝鮮髯は今年四十八の骨と皮、こりや堪らぬと俄に凹垂れしが、ふと思ひ

出して幸ひ熊公の許へ飛込みぬ、

『八卦屋さン、大變な御客様だね、ありやァ御新造だらう、一人は御妹御か何かだね、芥溜の鶴とは此こッたよ』

『眞實だ、かういふ時に熊さンが居ると宜いにさ、しかし細君氣を付けてね、どうせ御用があるだらうから頼むよ』

『あゝ承知してるさ、如才なく後で伺ッて見るからね』

『時に細君、そら去年の冬だッたね、あの色狂者め、心中の眞似を仕損ッて長屋中に差出した謝罪證文、熊さンの手許へ預けてある筈だ、ちよいと出して貰ひたいね』

『何を仕なさるンだ、いへさ、あるよ、書いたものは外にないンだから、すぐに分るがね』

『や、有難い、至念入用の儀が出來たンだ、濟めば持ッて來るから』

これさへあれば大丈夫、おのれ馬の脚めと飛出せば、もはや待兼ねて塀へ入りし體に朝鮮髯また我巣へ這込みながら、壁一重を隔てゝ機先を制しぬ、

『どうですい、花野さン世の中には隨分と珍らしく、思ッたよりは美い女のあるもンですな、わけて年の若い高島田の方は畫に描いたやうですぜ』

いへども寂として何の手應なし、

『花野さン、まさか不在ぢやァあるまい、どうしましたい、え、露雄さン、はゝァ聊か御立腹の樣子だな、そりやァ考へ違だ、いやさ怒らなくッても宜い事があるよ、面影の變らで年の積れかし、さて年は取りたくないね、折角この幸運齋が案内を仕たに、あの高島田が妙に後を振返ッて、汝さンの名を聞きましたぜ、流石に俳優人だ夜露に曝した五十近い賣卜者よりも自然どッか、垢ぬけて目に立つと見えますな、あれこそ主なき花の娘だ、歸り

がけを待受けて握れば、きッと出來さうだよ、長煙管も持ッて居らないやうだから、これは失禮、ハヽヽヽしかし問ふたのは眞實だ、好たらしい男ね全體ありやァ何といふ人ですッて、ハヽヽヽ』

こゝまで買出せど、其まゝ一言もない不思議さに、拍子ぬけの朝鮮鬚、おもはず小首を傾けし折しも、はや表障子の入口より面相を變へて現はれ來りし敵の姿に、かけ辨慶、ほッと驚いて懐中の謝罪證文を取出すや否、狼狽へて勸進帳を讀上ぐるが如し、

『どッこい、うかゝ〳〵這入れないよ、怨敵退散、これだ〳〵、私事身分の程も辨へずお長屋の諸君方に對して色男になりたき一心より、いやまだ奥に一段、面白い個處がある筈だ、そら出た、今後いかなる場合に立至り候ともウッカリ女の事は口より出すまじくさ、どうだね、ハヽヽヽ別して隣屋の幸運齋先生樣に對し奉りて頗る恐縮の至りに奉存候以上といふ添書があるよ、ハヽヽヽ』

大浦卓三、どこまでも斯の如く出來たる男なれど、流石に妻は女氣の今更に差俯いて涙ぐみつゝ、連れし妹もろとも思はず袖に眼を押拭ひぬ、

『まア良人、いくら何でも、何故こンなところへ、まさか、これほどでないと思ッて居りましたに』

『ハヽヽヽなアに宿屋住居したッて、汝方と同樓に居たッて、第一あのまゝ店に坐り込ンで居ッても或期限内までは差支ないンだがね、これには少々理由のあるこッたよ、いづれ後で分るさ、しかし、よく來たね』

『よく來たッて良人、平生の御氣性を存じて居ればこそ、お手紙のあるまで、じッと辛抱が

出來たンで御坐いますよ、さうでなくッて一月も、考へて御覽なさいましな、やう〳〵二歳になッたばかしの坊でさへ、片言交りに、お父樣は何處にッて良人、をり〳〵思ひ出して探すンですもの、妾、堪りませンよ、母も良人、どンなに心配いたして居りますか、この妹だッて此ごろは、ろくに外へも出ませンくらゐで』

『いや、汝方の阿母にまで心配かけて濟まない、だがね、今に乃公が一工夫あるンだから堪忍してくれ、ね、たとひ城は落ちても十萬や、二十萬の金で此まゝ斃れる大浦卓三でないよ

しかし鶴ちやン、姉さンのやうに、かういふ身體ばかり大きい御亭主を持つと不可ぜ、なンでも物事に神妙で正直な律義な、そして丁寧に失策のない男振の好い氣心の優しい旦那樣を持當て貰ひたい、ハ、、、、、』

『あら、姉さン、妾、一人で歸りますわ、折角來たに』

『こりやア惡かッた、ハ、、戲談だよ、ハ、、、、』

『何ですよ良人、どうして、まアさう暢氣になれるンでせう、こンなところに居らして、只お一人、よくまア今日まで、わけて贅澤な良人が』

『何、少しも不自由はないよ、人間といふものは二人以上で物が足りると却ッて不自由だが、かういふところに一人で居ると實に氣樂だ、保養になるね、腹が減れば近處へ食に出る、用がないから其間は毛布を被ッて大の字に寢る、淋しくなれば、をり〳〵長屋の奴を相手に面白い談話を聞くね、まるで別世界だよ、今に一件が落著したら汝方も二三日、來て見るが宜い、ハ、、、、』

『困りますねエ、全體、いつまで良人、こゝに斯うして居らッしやるンです、そして妾等、此後どう致せば宜しいンで御坐います』

『なるほど、さう切出されると笑ッても居れないね、つまり、もう三日で京橋の方が一段落を告げるよ、いや〳〵心配するに及ばない、その一段落に就いて乃公の工夫がある筈だ、こに今日まで居ッた效もあるンだ、ね、ところで汝方、やはり當分そのまゝ芝の阿母の家で厄介になッてるが宜い、たとひ乃公は、どう潰れても、汝の名に付けて置いた財産は別だ、彼奴等に指一本も觸らせないからね、どうか斯うか著て喰ふぐらゐの事は生涯まづ安心だ、亭主は商業上に倒れても妻子眷族の家庭まで斃す乃公でないさ、氣を丈夫に持ッて斯ういふ時にこそ寄席へでも演劇へでも行けよ、しかし、また一週間こゝへ來る事はならないぞ、店員の奴にさへ固く言含めて來させない乃公だから、さう度々、汝等に逢ッては不可、たゞ坊を大事に仕ろ、あれが二代目の大浦卓三だ、わかッたか、阿母に宜しく言ッてくれ』

右といへば右、左といへば左、いよ〳〵斯うといへば動かぬ筈の良人に諭されて、さらぬも平生の氣性を知りぬきし妻、あとに心は殘りながら、すご〳〵妹もろとも立出でつゝ、そッと朝鮮髯の塒を差覗いて小腰を屈めぬ、

『只今は有難う御坐いました』

八卦よい屋、はッと飛出して、俄に眞面目の慇懃さ、

『どう致しまして、わざ〳〵恐れ入ります、大浦さンには近ごろ別して御懇親を願ッて居りますもので』

『何分あゝいふ人で御坐いますから、この上とも宜しくお願ひ申します』

『迚も及びませンが、かやうな裏長屋には萬事お馴れなさらない方ですから、また拙者ども相應の御用は』

『お鄰屋の方へも、御挨拶いたす筈で御坐いますが』

『いえ何、鄰屋の奴、ハヽヽヽありやァ貴女、うか〳〵お言葉おかけ遊ばさない方が却ッて、實は少々、氣の變な奴で御坐いますよ、ハヽヽヽ』

入らざる事まで饒舌立てつゝ、長屋の外まで送り出しながら、ほしや〳〵髯の骨と皮でも生きた人間、今更姉妹の後姿に暫し其まゝ立停まりて、うッとりせし折しも、ちらと振返られて、はッと驚き、慌てゝ俄かの會釋もろとも飛込めば、破障子の内より花野露雄、

『八卦屋さン、ちよいと待ッて貰はう』

朝鮮髯、わざと平氣の體ながら、實は聊か薄氣味わるし、

『西川さン、石作さン、お在宿でせうな、時に花野さン、何か御用かね』

『用があるから呼ンだンです』

『なるほど、西川さンも石作さンも今、この俳優さンの用が濟ンだら急に御相談したい事があるから、どこへも出ずに居ッて下さいよ、さて色男、全體どういふ用だい、何、這入れ、ハヽヽヽ、近處の交際だ呼ばれて歩は停めるが、わざ〳〵御膝下へ呼込まれて承はる用はない筈だ、また先刻の謝罪證文一札でも讀めといふのかね』

『外の事は兎も角、この花野露雄は何故どこに氣が變だ、うか〳〵言葉をかけるなとは八卦屋どういふ理由だ、こりやァ證文の外だよ、さァ聞かう』

『ハヽヽヽ何の用かと思ッたら、その事かね、ありやァ汝さンの爲を思ッて言ッたンだよ、いえさ相手が御婦人で加之も容色が彼だもの、もし妙な工合に氣でも遠くなッた拍子、どンな間違がないとも限らないからね、危險だよ、萬一の事があッちやァ大浦さンに濟まないよ、去年の冬だッたか、折角あゝいふ結構な卦が出たから、運を握ッて放すなといへば

他の女房の手を握ッて長煙管の雁首を頂戴するやうな汝さンぢやアないかね、ハ、、、』

一時間の前には例の謝罪證文一札に追歸され、今また長屋中に恥辱の上塗せられて、いかな奴も默ッては居れぬ場合、さりとて口では叶はぬ無念の口惜まぎれに表障子を突倒すや否、こればかりは田舍演劇で喇れたる早業、無言の唐突に飛出して朝鮮髯に喰ひ付けば、きやッと叫ンで遁げも得せず、

『西川さン石作さン、この野郎、痛い、たゞ助けてくれッ』

朝鮮髯と色狂者が摑み合の喧嘩に、西川と石作が飛出しての仲裁、いかなポンチ繪にもない圖なり、

やう〳〵左右に引別けて西川は花野露雄を其塒へ押込みつゝ、石作は朝鮮髯を我塒へ連込みつゝ、その顏を見れば、青く痩こけたる頰骨の上を赤く二筋も搔拐られて、水を放れし寒鮒の如く、ふッ〳〵と息切の體なり、

『どうしたもンだね、つまらない、あンナ青二歳を相手にしてさ、年齡と髯に對しても考へるが宜い、お互に自分の女を取ッたでも取られたでも無いぢやないか』

『いや、それは冤も角、けしからン野郎だ、彼奴、此まゝでは無事に濟まされない、今に熊さンが歸ッて來りやア篤と相談して』

『ハ、、、篤と相談も何も入らないよ、どッちかと言やア、實は君の方が善ないさ、わざわざ喧嘩を買出したやうなもンだからね』

『石作さン、仲裁は有難いが、さう言はれちやア困るよ、何も拙者が、わざ〳〵好ンで』

『まア宜いさ、こうなッたッて長屋中で相手の肩を持つ者は無いよ、しかし怪我ア無かッたかね、すぐ飛出して引分けたが隣分手酷く遣られたやうだぜ、も少し遲けりやア大變だ、

おもはず助けてくれと言ッた聲が、よほど苦痛さうだッたぜ、ハヽヽヽ』

『何、さういふ事を言ッた覺はない、そりやァ彼奴が苦しまぎれに出したンだらう、意氣地のない奴だ』

『ハヽヽヽどッちだか聲で知れるよ、第一あの場の樣子ぢやァ迚も顏の蚯蚓膨ぐらゐで治まりさうもなかッたぜ』

『え、蚯蚓膨、どこに、拙者の顏、や、あの畜生、酷い事を仕やァがッたぞ、なるほど痛いよ、さァ承知しない、石作さンこの仲裁不服だ』

『おい〳〵どこへ出るンだ、今こゝで止まらなきやァ止めないぜ』

『なァに止めなくても宜い、止めて貰ッちやァ迷惑だ、あの青二歳め、いよ〳〵今度こそ本氣の沙汰で拙者が腕を見せてやるンだ、かういふ時に幸ひ取ッて置の膽魂を出してやらないと今後が面倒だ、癖になるよ』

默ッては飛出さず、わざと大聲に叫びながら、石作の塀を餓鬼人形の如く躍り出せば、花野露雄を押へて立出でし西川に抱止められ實は願ッたり叶ッたりの朝鮮髯、ま〳〵生り出しぬ、

『放した、西川さン放してくれないと後で恨むよ西川さン、平生の幸運齋と聊か違ッてるンだ』

『これさ、何をするンだい、馬鹿々々しい、やッと一方を治めて來たンぢやァないか、それに五十面さげた方から、また盛返しては困るよ』

『いや五十面さげたものを彼奴、馬鹿に仕やァがるからだ』

『わかッてるよ、わかッてるがね、さう跳ッ返ッちやァ腹が減るよ』

折しも長屋の入口に車を飛降りながら、驚いて立停りし八字髯は大浦卓三を訪來る例の黒川といふ辯護士、それと見るや否、

『やア西川さン暫く中止だ、喧嘩よりもお客樣だ』

其まゝ西川の手を振切ッて、すた〳〵と奥の方へ御注進々々〳〵、

いよ〳〵浮世の落城に三日を餘せし大浦卓三、七人の包圍攻擊に采配を打振る黒川辯護士と、今この八軒長屋の九尺一間を軍門と定めての談判、城を枕に討死するか圍を解いて和睦するかの境目なり、

『大浦さン、お互に今日は打解けて、所謂る胸襟を開いて、斯る場合には最も多く用ひらるゝ權謀とか術數とかいふ一切の駈引を去ッて仕舞ッて、つまり事の結果に必要な點のみを加之も露骨に簡單に御相談しようぢやありませンか、實は債權者の方から度々かう歩を運ンで來るといふのが、既に一歩を讓ッた證據で、もはや貴君に充分、内兜を見透されて居ますがね』

『ハ、、、さういはれると困りますが、お言葉に依ッて露骨に簡單に、うち解けて駈引のないところを申せば、いかにも失禮ながら債權者の腸を見ぬいて居ますよ、黒川さン、この大浦卓三に兎も角も競賣期日の延期を願ひ出せとの事でせう』

『さやう、多少の不利益を覺悟の上で今日、伺ッたのは眞實その事です、大浦さン、無論、延期を望まれるでせうな、まさか競賣を喜ンで待たるゝ筈はないでせうな、それとも意外の點に嘔吸のある貴君だ、如何ですな』

『こりやア黒川さン、聊か皮肉ですね、致方ないから觀念したので、何とか其間に致方があ

れば、わざ〳〵好ンで誰が自己の亡ぶのを待ちますかね、半殺しに仕られた蟲でも寸隙さへありやァ遁出しますぜ』

『ハヽヽヽどうも大浦さンは談話が巧いから、うッかり餘談に乘れない、ハヽヽヽそれでは萬事、あらためて、ゆる〳〵また雙方のために善後策を講じませう、差當ッて今日のところは、三日後の競賣に延期屆を出して下さい』

『まづ一安心だ、有難い、固より喜ンで出します、どうか債權者の諸氏に貴君から宜しく』

『承知しました、その邊は如才なく傳へて置きますが、偖かうなると却ッて妙なもンで往々かういふ工合に主客の勢ひが轉倒して來ますよ、ハヽヽヽ負債も程度問題で、大きく出來ると面白いですな、勿論、その人の信用代價ですから、いよ〳〵事實の不結果を來すまでは借金も財産の部ですよ、この樣子では大浦さンも目出たく財産の部に歸しませう』

『なァに黑川さン、借金して居ながら斯ういふ傲慢な奴ですからね、實に憎し味の餘、一氣に潰さず長く苦しめて、見物せられるンでせう』

『さう取ッては大浦さン、いけませンよ、しかし只今の延期屆認めて來ましたから、これ〻御自筆で調印を』

『なるほど、また二週間の猶豫を仕て下さるンですな』

『さやう、三日後の二週間ですから、よほど御工夫の餘地がありませう』

『ところで、黑川さン、こりやァ此まゝ無條件ですか』

『世間の例に依れば四十日も延期した後また二週間ですから、迚も無條件では無效です、滯納の利子だけを入れるとか全額の幾分を差出すとか何とか、いづれ必ず相應の實行を件ふべき筈ですがな、及ばずながら黑川が債權者を說いて、貴君のため、實は大に盡した覺悟

です』

『黒川さン、とンだ間違だ、債權者の方へ取られる條件でない、此方へ貰ひたい條件だ、この延期屆の調印は無價ですかい、負債のうち幾何を引去るとも何ともなく只こゝへ調印するのは少々考へもンだ、大浦卓三、お氣の毒ですが、ちと出來兼ねますよ』

流石の黒川辯護士、あッと呆れて暫時その顏を打守れば、二十貫の大兵肥滿、のッしりと悠然たり、

主客の勢も事こゝまで顚倒しては、もはや言語道斷の至極ながら、たゞ呆れても居れぬ黒川辯護士、おもはず膝を進めて容を改ためぬ、

『大浦さン、只今の御言葉は戯談ぢやァ御坐いますまいな』

大浦卓三、どこまでも平然として悠々たる體、加之も滿面の微笑、

『この際に黒川さン、何、戯談が言へるもンですか、四十日も競賣の延期した後また更に二週間の延期で加之も無條件といへば、なるほど、いかにも世間に例のない寛恕な債權者でせうが、そりやァ世間に例のある尋常の債務者に對ッて誇るべき事だ、この大浦卓三には少々〳〵恩の著せ工合が違ッて居ますよ』

『ます〳〵以て、けしからン』

『ハ、、、黒川さン、貴君も當時の辯護士中では最も談話の早いといふ評判の方だから、つまらない餘計な事は饒舌りませンがね、二日以前あの坂上さンと同道で來られた時よりはこの大浦に對する債權者の形勢が一變した筈だ、神戸邊から俄に誰か加入したものはありませンかね、ハ、、、あるでせう、日取を考へて見ると恰好、昨日あたりだ金額は一口で六萬三千七百圓、どうですな』

『大浦さん、實に貴君ァ豪い、この黒川も隨分これまで種々な人間に接して、いろンな混入ッた事件も扱ッて見ましたが、まづ貴君のやうな大膽で周到で意地の強い底の深い人には始めてだ、あれだけの立派な商店を一時に差押へられたまゝ慌てもせず平氣に妻子の方を他へ預けて自分は斯ういふ裏長家へ濟し込ンで、加之も債權者に其後たゞの一度も歩を運ばず、寧ろ呼付けて、いよ〳〵競賣期日の間際に突然と一大堤防を築き出した手腕、實に驚きましたね、いかにも神戸の清商で葉昌永といふ者から不意に六萬三千七百圓の破産申請が出ましたよ』

『ハ、、、出たでせう、出る筈だ、いや出せと言ッて遣ッたンです、しかし黒川さん、策略でないよ、大浦卓三は男です、よく世間にある一夜細工の卑劣手段でない、こりやァ今度の債權者よりも以前の取引上から出來た債務で、その年月と一切の證據書類を見れば分りますよ正しく六萬餘圓の舊債だ、法律上の事は知らないが、德義上からは貴君の扱ッてる分を佇置いて支拂ふべきもンです、七人の債權額が十三萬餘圓で財産競賣の見積が二萬内外の不足といふ一昨日の御言葉でしたね、すると前後差引、こりやァ大變な御迷惑を、かけねばならない勘定だ、ハ、、、笑ッては濟みませんが、どうも致方がない、第一あの神戸の葉といふ清商は、なか〳〵腹の太い奴でね、どこが氣に入ッたか、多年この大浦卓三を頗る買ッて居てくれましたよ、だから六萬や七萬では商店の機關を差止て自己も損をするやうな、そンな目先の見えない馬鹿な事は仕ない筈ですが、あまり此方の火の手が嚴しいからね、實は灰にならないうち本人の卓三から委細を言ッて遣ッ[illegible]至急かう仕ろと賴ンだのです、强ち七人の債權者に堤防を築いた理由でもない、つまり葉の權利に對する當然の義務ですよ、しかし以上の始末は兎も角、延期は有難い、あらためて二週間の調印を仕

ませう、否、さして戴かう、なアに最初に打明けて神戸の事を聞けば、すぐ喜ンで調印も仕たンですがね、互ひに一切の駈引なく胸襟を開いて相談しようといふ、その貴君に多少の駈引があッたから聊か癪に觸ッて、ちよいと、ふざけましたのさ、ハヽヽ、貸した奴より借りた奴の威張れる道理があるもンですか、黒川さン、何分この上とも宜しく願ひますよ』

兀として忿たる中に油を流せし如き圓轉滑脫、どこが五體の急所やら更に知れざる男なり、

七人の債權者に圍まれ十三萬圓の借金を背負ひ、財産は差押へられ妻子は他に預けて身は棟割長屋の奥に落込ンでも、食はねば生きて居れぬと笑ひながら、例の黒川辯護士に一泡吹かして追歸せし後、また悠々閑々ぶらりと夕飯に出る大浦卓三、絲瓜の中に鐵丸を仕込みし如き男なり、

加之も案外の世辭愛嬌、まづ出がけに鄰屋を差覗いて微笑を含みぬ、

『はゝア御亭主まだ歸らないね、細君、をり〳〵壁越に嫌な事を聞かして、お氣の毒だね』

『どう致しまして、お客樣と存じましたから何か御用を伺ひに出る筈で御坐いますが、うろうろ妾どもは却ッて、ホヽヽわざと差控へて居りますので』

『ハヽヽなアに當分、客待遇をするほどの奴は來ないさ』

笑ひながら其鄰屋の朝鮮髯を差覗きぬ、

『八卦屋さン、お在宿かね』

『は、居りまする』

『居りますは宜いが、先刻は全體、どうしたンだ、猿でも絞殺されるやうに、きやッ〳〵と』

『や、御承知なンですか』

『聾は居らないよ、この長屋で、あの大きな聲だ、飛出しても仕樣がないから默ッて居たが どうか以後はあゝいふ事で喧嘩して貰ひたくない、やるなら自分の事で死ぬか生るかの掴み合をするさ、その時こそ面白く見物に出るよ』

『恐れ入ります、いえ何、さういふ理由では御坐いませン、つい事の行掛りで、實は鄰屋の奴が』

『鄰屋の人はどうでも宜いよ』

『しかし彼奴なか〳〵危險な奴ですから、もし奥樣や御妹御に萬一、間違でもあらうかと存じまして』

『おい〳〵困るな、それが此方の迷惑だよ、ハヽヽヽ兎も角も一應、何とか鄰屋へ挨拶を仕なければならない』

『どゝ何して貴君、さういふ事をなすッちやァ鄰屋の色狂者奴、圖に乘ッて何をするか知れませンよ、うか〳〵なさると御妹御を嫁にくれなンか、言兼ねない奴ですよ、そりやァ御關係なさらない方が宜しい、ねエ西川さン石作さン、これまでの例に證據人が居りますよ』

『喧嘩の止手に呼出さしたり證據人に引出されたり、ハヽヽヽ近處が災難だ、なァに女は緣次第、欲しいと言やァ隨分、遣りもするさ、どうせ生涯あのまゝの娘でも置けないからね どうだ八卦屋さン外に先約さへ無きやァ、いッそ汝さンが貰ッてくれないか、妹に限らない、妻女でも相談に乘るよ』

流石の八卦よい屋、ぐうの音も出ず、ごそ〳〵と吊戸棚の下へ這込めば、大浦卓三、高笑ひのまゝ鄰屋の花野露雄が入口へ歩を運びぬ、

『この奥の大浦です、つい機會がなくッて今まで親しく談話ませンが、先刻は女ども尋ねてまるッた節、いろ〳〵御面倒でした、しかし、それがため、とンだ事になりまして、ハヽ、ハヽお閑暇の時お遊びに來て下さい、さのみ遠路でもありませンからな、ハヽヽヽ』

きくや否、平生さへ自己を忘れし花野露雄、もはや眼も眩ンで這出しぬ、

『有難う御坐います、實は前々より伺ひたいと存じて居りましたところで、早速ながら今夜お在宿で』

『ちよいと今、出ますがね、すぐ歸ッて來ますよ、お出なさい、演劇の方だと聞いて猶更、いろ〳〵面白い談話があるでせう、ハヽヽ、聞かない前から呵しい、ハッハッヽヽヽ』

いかに一種の病的とはいへ、これは此奴また上氣せ過ぎて恥しらずの哀れに出來たる厄介もの、例の喧嘩に付いて鄰屋の朝鮮髯へ一本まゐりしのみか、生涯あのまゝの娘でも置けず女は緣次第、ほしくば遣ると洒落伸したる大浦卓三の言葉を本氣の沙汰に受けて、ほッとせし眞正面より遊びに來いといはれては、花野露雄、もはや前後の差別なく、のこ〳〵と押掛行きぬ、

閑暇さへあれば鬼でも蛇でも相手にする大浦卓三、面白ければ猫の死骸も踊らして見る好奇心、まして長屋中へ謝罪證文一札を取られしと聞及ぶ色狂者、これが俳優かと思へば猶更興に入りて、聊か罪な事ながら、さも待受けし體に喜び迎へぬ、

『さア此方へ、お互に一家内も同じこッた、遠慮は入らない、うき世といふものは眞面目なやうで、その實は七八分まで熱に浮かされた寢言のやうなもンだ、つまり丸いが宜いね、をかしく變に四角張ッても無效だ、ハヽヽヽ思ッた事は言ふが可し、したい事は爲るが可し、

ハ、、、』

『いや、眞實で御坐いますよ、誰だッて腹の底には、いろ〳〵、いひたい事や、したい事かあるンですから、相手の方さへ氣が大きくッて、心が廣くッて居らッしやれば』

『なァに廣くッても狹くッても、そンな事は構はない、そりやァ先方の勝手で、此方は此方さ、まづ早い談話が十人に當ッて見て、その中の一人を自分の思ッた通りにすりやァ、一割だ、怪しい株券や公債を持ッてるよりも、よほど確實で加之も安心だからなァ、ハ、、ハ五人で一人出來りやァ二割だ』

鄰屋の色狂者め、大浦卓三の許へ這込みしと見るや否、坐ても起ッて居られぬ朝鮮髯、折しも歸り來りし熊公を呼入れながら、そッと聲を潛めて眼を剝出しぬ、

『熊さン大變だ』

『おや、また汝の大變が始まッたね、どう仕たンだい』

『どうしたッて、大變だよ熊さン、鄰屋の奴め今、のこ〳〵大將の御膝下へ出かけたぜ』

『宜いぢァねェか』

『よがァないよ、あの野郎、けしからン奴だからね、うか〳〵あのまゝ、うッちやッて置けないさ、實ァ今日、喧嘩をしてこの通りだ、頰骨の上を搔拐りやァがッたよ』

『ハ、、、よく近頃ァ、やられるな、しかし今日は髯でなくッて僥倖だ』

『おい〳〵熊さン、さう落著いて居ちやァ困るよ、どうせ彼奴、拙者の事を善くは吐さないかちね』

『彼奴に限らず、誰だッて汝の事を善くは吐さないよ』

『や、これは酷い、力に頼む熊さンまで、その氣で居られては心細いよ』

『ハ、、、しかし、あの馬の脚め何をいふか、面白いね、わッしの家へ來なせエ、そッと壁越に聞かう』

大浦卓三が如何なる人物とも知らず、たゞ自己が梅暦の虎の卷より割出して、あの米八を上品にせし如き丸髷の亭主と羨みながら第一は畫にも描けぬ高島田お蝶に似たる娘あれが妹、欲しくば誰にでも遣るとの言葉に猶更有頂天の花野露雄、あはれや肺病よりも癩病よりも療治の届かぬ病なり、

『甚だ失禮な事を伺ひますが、どうして貴君は何故かういふ裏長屋へ、誰が見ても變で御坐いますよ、あまり御人體が違ッて居りますから』

『何、どこが違ッてるもンか、借金のために逃込ンでるンだから、借金が無くッて住ンでる人よりも大貧乏な理由だ、ハ、、、しかし汝さンこそ目に立つよ、流石に素人でないね、まだ若いから修行次第で大立物になれるだらう、なるべく女に惚られない用心するが宜いよ、男は劍難よりも女難が怖ろしいといふからね』

『いえ無論その邊は平生から心掛けて、なるべく用心に用心を重ねては居りますが、何分、一人身で、かうして居りますと、をり〳〵蒼蠅い事が出來まして、実に困り果ますよ』

『なるほど、そりやア、さうだらうな、然うありさうなこッた』

『中には退くに退かれぬ義理と人情に搦まれましてね』

『や、義理と人情、此奴また怖いぜ、つい已むを得ずいや〳〵ながら、引摺込まれるからね』

『眞實で御坐います、よほど氣強く持堪へないと、なか〳〵危險です、しかし今日まで、ど

うか斯うか切抜けてまゐりましたから別段、さう間違もなく、その代りに隨分、いろンな諸方から怨恨をうけまして』

『ハヽウ、鮑の貝で取巻かれるといふ理由だね、ところで近來は、どこの演劇へ出なさる』

『さ、それに就いてで御坐います、どうも演劇者と申すものは、いくら高尚張ッて改良いたしたところが、やはり演劇もので、さう君のやうにピン〳〵と片ッ端から跳付けちやァ人氣に觸ると、かういふ卑しい事を貴君、それがため近來は當分、舞臺へも出ずに只、をりをり、ちよいと樂屋へ顔を出しますばかりで』

『困ッたもンだな、いッそ今のうち早く女房を持てば宜からう、いよ〳〵あれがあの人の妻と極れば、可哀さうだが、今まで藻掻いた四方の女共も一時に諦めて仕舞ッて、さう怨まれもすまいよ、そこで腕さへありやァ、今度こそ藝に付いて眞實の人氣だ、兎も角、いつまで獨身で居るから蒼蠅く覘はれるンだ、いくら何でも物の冥利といふ事があるよ、あまり多くの他を迷はすと自然その應報が來て、終焉が善くないよ』

『ヘエ、考へて見ると、何だか末が案じられますやうで』

『だから一日も早く、思ひ切ッて緣のあり次第に妻帶するさ、もし萬一その氣がありやァ、實は此方にも少々、心當りの無い事もないが、どうだね』

壁を隔てょ鄰屋に耳を欹てし朝鮮髯、おもはず吹出さンとせし口に手を當てながら、骨ばかりの肩を動かしぬ、

『色狂者が、そろ〳〵本性を現はして來るぜ』

熊公も聲を潛めながらの苦笑ひ、

『とンでもねェ奴だが、大將も隨分また人が悪いよ』

食が進ンで胸が開いて召上るものに自然の味が出る、ひりょと馨しい七味唐辛子といへど、實は此奴いかなる浮世の混合物あるやら知れぬ喜助、朝のうちに市中を賣歩いて、歸れば貧乏馴れた額越に底光りの眼を剝出しながら、表障子の破れ穴より用もない外を差覗いて、じろ〳〵長屋中に何か事あれと窺ふ體、されど一蓮托生の貧乏長屋、いづれも同じ食ふや食はずの奴等うか〳〵交際ば商賣物の一袋も却ッて仕てやらるょ程の中に、只あの大浦卓三のみ取付いて損のない樣子ながら、南無三寶、それとも知らぬ最初に鄰屋のお虎婆と口を揃へて毒吐きし事あれば、流右に今更近處合壁の手前、這寄ッて脚下にも吸付かれず、さりとて立寄れば酒も飲ませ飯にも連れて出る相手を、みす〳〵此まょ見遁すは殘念至極と、人しれぬ腕を組ンで首を捻ッた一想案、

いひ合さねど同じ後悔のお虎婆、加之も近來は長屋中の除外物にせられて、いかな業突張も突いて出る手應のない折柄、現在の眼前に大鳥の巣を控へながら、只その羽翼の音のみ聞かされつょ、實は口惜しいやら羨ましいやら、そッと壁越に鄰屋の喜助が脈を取りぬ、

『喜助さン、どう仕て居なさるよ』

『別段、これといふ變ッた藝もなく、この通り膝小僧を抱いたまょ無事息災に、ぼンやりして居ますよ』

『そりやア汝さンにも似合ず、あまり藝が無さ過ぎるぢやアないか向側を見なさい、此ごろは何だか妙に、ざわ〳〵と景氣づいてるやうだぜ』

『さ、それに就いてだよ、最初の見當と違ッて、あの肥ッてう案外、懷中工合も痩こけて居

ないらしい模様だ』

『喜助さン、しまッたね』

『ちよいと遣損ッたよ』

『かうと知りやァ、他より先に油をかけてやッたにさ、惜しい事をした、うまく出直して何とかなるまいかな』

『さうだね悪く言ッたもンの、本人に向ッて毒吐いたンぢやァないから、よし告げる奴があるにして、何とか誤魔化せさうなもンだよ、此まゝ意地を張り通したッて一文にもならないからな』

『眞實だ、無い奴を譽めて有る奴と喧嘩でもすりやァ間違ッてるが、最初に無いと見たから譽めなかッたので、それが案外、あると見て喰ひ付くなァ世間一般、人間の正當だよ、また無くなりやァ唾も引ッかけてやらない代に今のうち喜助さン、萬事殿樣待遇で取れるだけ絞り取ッてやるさ、外の奴等ァ旦那待遇だからね、その中へ此方は一番、ぐッと大安賣の卸し値で殿樣に仕て見なさい、肥ッてう奴、きッと調子に乗出すよ、しかし喜助さン念を押して置くが、まさか一人占にはすまいね』

『そりやァ大丈夫、安心するが宜い、苦勞人の喜助だ、敵の咽喉笛に喰ひ付いても味方に沸湯は飲ませないよ』

味方に沸湯は飲ませずとも、大浦卓三の咽喉笛に此奴が喰ひ付き得るや否や、

大浦卓三、例の如く夕飯に立出でつゝ、今しも吾妻橋を渡らんとせし背後より、そッと小走りに追付きし七味唐辛子の喜助、

『旦那様、どちらへ』

『や、唐辛子屋さンか、ちよいと淺草の方へ行くが、旦那様は困るね』

『だッて外に貴君、我々風情から、何とお呼び申すンです』

『大浦さ、卓三ですよ』

『恐れ入ります、ところで、實は少々、お願ひが御坐いまして、先日から今日こそ、今日こそと存じて居りますが、つい申上げ兼ねまして』

『ハ、、、お互ひに同じ長屋住居だ、他から物を頼まれる力は迚も無いよ、しかし何か大浦卓三に出來る相談なら、また聞いて見るが、この途中ぢやァ、兎も角も歸ッての上にしなさい、まだ汝さンとは打解けて話した事がないから、幸ひだ、ゆる〳〵今夜』

『いえ勿論、かやうな途中では失禮と存じましたが、長屋では聊か外の者の手前、それも別段、さし觸りのない事では御坐いますが、やはり何となく、第一この喜助は御承知の通り無口の變物で、あまり長屋中にも親しく致しませンから自然、憎まれものゝ狀態で、妙に目立つかと存じまして』

『いやに遠慮深いところがあるね、ぢやァ歩きながらでも宜いが、色でいへば白とか黑とか、手ッ取り早く、あらましの大體だけ聞かう全體、どういふこッてすな、かい摘んで』

『へェ、手ッ取り早くと申しましたところで、さう一言には』

『つまり何だね』

『實は拙者の一身上で御坐います』

『一身上、もし運氣でも見るなら、あの八卦屋が本職だ、門違しては不可よ、ハ、、、』

『御戯談を』

『いや眞實だよ、また身でも立てる事に付いての相談なら、其方よりも此方が御相談を願ひたい最中だ、いづれ聞いても居なさるだらう、風雅でも洒落でもなく京橋の中央から眞ッ倒樣に落込ンで來た人間だからね、どンな最屑目に見てくれても當分まづ他に相談しかけられたり物事を願はれたり頼まれたりする奴でない、但し商賣に損をする事と酒でも飲ンで馬鹿談話する事だけは、なか〳〵巧いよ、どこの誰にでも負けない覺悟だ、ハヽヽ』

突いても引いても案外これは動かぬ相手、加之も夕飯への途中を覗うて來たに、あの朝鮮髯さへ連れて行く奴が、この我へ何ともいはぬ體、さては最初の一の矢を射損ぜしためと思へど、折角の二の矢を捨てゝ此まゝには置かぬ喜助、

『さ、そこで御坐いますよ、海と川との相違は御坐いますが、實は旦那樣、拙者も借金のため妻子を置去に致しまして、あの長屋へ暫時、身を隱して居りますもので』

きくや否、大浦卓三、じろりと始めて喜助の面體を睨みぬ、

『借金は面白いが妻子の置去は酷いね、自分は兎も角、妻子だけは立つやうに仕て置くもンだ、それぢやア情がない、第一また隱れて忍ぶ身に唐辛子を賣歩くとは變だ、しかし汝さンのやうな嘘吐は乃公が好きだ、幸ひ夕飯を喰に行くから來なさい、嘘の吐き競爭をして見よう、大浦卓三なか〳〵人を欺す事も巧いよ』

流石の喜助、あッと呆れて其まゝの立往生を、大浦卓三、見返りもせず悠々と歩み出しぬ、

七味唐辛子の喜助、ひりッと大辛に喰せし筈ながら、べろりと案外の大甘に舐められて、其まゝ自己が塒へ走歸るや否、おもはず舌鼓を打鳴せば、待受けし鄰屋のお虎婆、年にも似合ず慾には猶更、耳の近い壁越の小聲、

『喜助さン、大變に早いぢやァないか、どうだッたい、うまく遣ッたかね』

『無效だよ』

『無效、なぜ無效だね』

『何故ッて、あの肥ッてう奴、芋の煮えたも御存じない大揚な面ァ仕てるが、なか〳〵豆腐の煮加減まで承知してる奴だ、迚も淺い藝ぢやァかゝらないよ』

『はゝァ、いよ〳〵最初の毒吐いた事を、誰か饒舌ッた奴があるンだな、べこ〳〵と薄ッぺらな胡麻すり野郎あの朝鮮鬏だよ、畜生、しかし喜助さン、まさか惘然と凹垂れて歸ッたンぢやァあるまいね、どッか出直して喰付く急所だけは目ッけて來たらう』

『ところが、どこに急所のあるか、さッぱり分らない奴でね、うぬが勝手な事を吐すだけ吐して後も見返らず、さッさと歩の向く方へ往ッて仕舞やァがッたよ、あの樣子ぢやァ殘念ながら當分まづ近寄れないぜ』

『何だね、意氣地のない、わざ〳〵途中まで追ッかけて出てさ、夕飯の一ッ腹も肥さずに其まゝの逆戻たァ、喜助さン、器量が下り過ぎるぜ』

『なァに隨分、際どく切込ンでは見たンだがね、どうも手應のない奴だよ、頭から人を馬鹿に仕やァがッてね、しかし喧嘩にもならず、をかしく出りやァ、あの圖體だ、糞いま〳〵しくッて堪らない』

『それも長屋中が一列に、さうなら堪忍も出來るが、みす〳〵他の奴等には飯も酒も惜氣なく振舞ッてさ、汝さンと妾だけを別物のやうに仕やァがるのが癪だ、いッそ何とか腹癒の工夫は無いもンだらうかね』

『おい〳〵婆さン、歸ッて來やァがッたよ、そら今、あの千三屋と鄰屋の西川を相手に何か

大きな聲でさ、や、馬の脚も朝鮮髯も負けず劣らず、お世辭を竝べて居やァがるぜ』

はや夕飯を濟して歸り來りし大浦卓三、長屋の入口より左右へ面白半分の愛嬌を振蒔きながら、喜助の戸口に歩を停めて、そろりと差覗きぬ、

『唐辛子屋さン、先刻は失禮しました、ハ、、、小兒のやうだが、あの時は腹が空いて夕飯が待ち遠くッて、つい急いてね、只その方ばかりに氣を取られて居ッたからね、何を言ッたか自分でも分らなかッたが、箸を取りながら段々よく考へて見ると、どうも濟まない事を言ッたらしいよ、ハ、、、しかし如何ですな、別段、あらためて仲直りするほどのこッてもないが、お互に打解けて面白く話さうぢやありませンか』

こゝが七味の外に浮世の混合物ある唐辛子賣、これ僥倖と向直るや否、痛くない疵でもすれば膏藥代の出る奴と、そろ〳〵本性を現はしかけぬ、

『酒に醉ッて何を言ッたか分らない奴はあるが、夕飯の腹が空いて自分の饒舌ッた事を忘れる奴があるかい、加之も箸を取りながら段々よく考へたとァ、どこまで人を馬鹿に仕やァがるンだ、え、おい、外の奴等と違ッて鐚一文お世話になッた覺はねェぞ、さァ承知の蟲が消えて仕舞ッたァ、どうしてくれるンだい』

お虎婆、壁際に口を當てゝの小聲、

『うまいね、そこだよ、しッかり賴むよ』

順で叫はねば逆に食付く奴、例の女物を仕立直せし素袷に貧乏馴れた額越の目を光らしつゝ、七味唐辛子に呼馴れたる聲を張上げて叫び出しぬ、

『さァ承知が出來ないンだ、うぬも此方も同じ家賃を拂ッて恩も義理もねェ一蓮托生だ、なぜ人を馬鹿に仕やァがッた、ついでに長屋中へ謝ッて置くが、この大浦といふ野郎に一ッ

垂滴の酒でも一ツ粒の飯でも妙な工合になッた奴ア仲裁に出られねエぞ』

こいつ面倒と我堪へ入りし大浦卓三、かくと聞くや否、靜かにランプ代用の西洋蠟燭を立て

て、表障子を引開けながらの高笑、

『ハヽヽ、唐辛子屋さン、そこで喚くよりやア、こゝへ來なさい、なか〳〵面白い人だ、談

話といふものは近くッても離れて居ては興がないよ』

『なゝ何だと、べらぼうめ、談話ぢやアねエだぞ』

『はゝア喧嘩かね、もし喧嘩なら猶更近寄ッて來るが宜い、いくら怒ッても其處では手が屆

くまい』

『や、この肥ッてう、いよ〳〵人を馬鹿にしやアがるな』

『同じ事で、この豚野郎と言ッた方が手嚴しく聞えるね、いかにも二十貫と六百目だ、痩せ

ては居ないよ、また馬鹿にしやアがるとの御不足だが、實は失禮ながら、あまり怜悧とも

思ッて居ないさ、しかし此方も其相手といへば、なるほど、やはり怜悧でないね、ハヽヽ

ハ』

『よし、さう吐しやア、今そこへ出かけて遣らア』

小指の端を擦剝いても、膏藥代で半月か一月は寢て食ふ覺悟、わざと袖を卷上げ裾をからげ

て、威この出刃庖丁もなければ、持合せの古手拭を鷲掴みのまゝ、ぬッと飛出す眼前に朝鮮

髯、

『この八卦屋め、何を仕に來やアがッたンだい、すッ込ンでろ、平生の七味屋たア違ッてる

ぞ』

生憎く熊公まだ歸らず石作は居らず、西川まで今日に限ッて外出の折柄、朝鮮髯、はッと驚

いて物もえ言はず逃出せば、以心傳心の鄰屋より待受けしお虎婆が飛出して俄に抱止めぬ、

『まア喜助さン宜いぢやアないかね』

『なアに、かういふ野郎を此まゝ默ッて居ちやア圖に乘ッて何を吐すか知れねえから乃公が一番、やッつけて遣るンだ、畜生、ふざけ過ぎるよ』

『だッてさ、まア宜いッてば』

『唐辛子は賣歩いても先方から賣出された喧嘩ア隨分、買ッて見る氣だ、老年のくせに危險いよ、放した』

『いや放さない、いくら年は取ッても抱止めた以上は放さないよ』

『なぜ放さねエンだ』

何故でも放さない、この長屋で草分のお虎婆だ』

大浦卓三、滿面の微笑を浮べながら、のそりと起ッて、ます〳〵洋蠟の手燭を差出しぬ、

『婆さン、本人の希望だから放してやる方が宜からう』

ゆッたりと春の小山に似たる大浦卓三の前に、がさ〳〵と枯木の枝を組立てしが如きお虎婆、

『あゝいふ人間と彼是なすッちやア、つまりませンよ、高が七味唐辛子を賣歩いて、やッと其日を送る男ですもの、お勝ち遊ばしたところで何にもならず、痩せても下司は手が早う御坐いますからね、もし萬一の事があれば旦那、それこそ大變だと考へまして、兎も角も妾が抱止めたまゝ無理に押込ンでは置きましたが、やはり後が蒼蠅う御坐いますよ、つまり旦那と取組めば勝たなくッても先方の手柄で、旦那の方は御人體負をして居らッしや

るンだから』

『ハヽヽヽ人體負、そりやァ外に家を持ッて身分ある人のこッたらう、彼奴のいふ通り同じ長屋で同じ九尺一間の家賃を拂ッてる以上、勝ッた方が勝ッて負けた方が負ける同じ人間だよ、別段また用もなく毎日、ぶら〳〵斯うしてるンだから、いつでも閑暇で相手になるとすりやァ後の蒼蠅い理由も無からう、しかし老婆に厄介かけて濟まないね』

『あら旦那、御戯談を、何が同じ人間なもンですか、誰が貴君と彼奴を同じやうに見ますもンかね、きッと後が蒼蠅う御坐いますよ』

『ぢやァ蒼蠅いとして、どうなるンだ』

『どうなるッて、どうもなりは致しませンが、御人體の上から申せば、どうか仕て、おやり遊ばした方が宜しいかと考へますよ、折角かうして妾も、中間へ這入ッたもンで御坐いますからね』

『はゝァ、どうか仕てやれとは全體、どう仕てやるンだね』

『早く申せば、幾何かね旦那、犬にでも喰ひ付かれたと思召して相手が旦那、あれですもの、いづれ御損で御坐いますよ旦那、時の災難でさ』

『むゝ金でも遣れといふのかね、ハヽヽそりやァ隨分、遣ッても宜いが、彼奴には一文も遣れない、しかし婆さン、汝さンなら幾何か出す氣にもなるよ』

『おや、旦那、まァ、濟みませン事、だから御人體が違ッてると申すンですよ、いえ何、旦那、彼奴は妾が何とも致しますからね、實は旦那、妾も今年が六十六で御坐います、若い時分は、ちよいと乙に暮した事もあッたンですが段々と不幸でね貴君、麻布に一人の娘が御坐いますばかりさ、それが旦那產ンだ子よりも貰い娘でせう、すれば猶更大切に仕てく

れないぢやァならない筈ですが、この阿魔め、とンだ料簡の悪い女で、うぬは好いた野郎と相應に世帶を持ッて居ながら、わづか月に一圓五十錢づゝ、それも此方から出かけて往ッて、やう〳〵喧嘩腰に取ッて來るといふ、なさけない始末でね、この老年になッて何故、まァかう苦勞するかと殘念で堪りませンが、性質、氣が弱くッて馬鹿正直で御坐いますから、つい涙脆く、せめて後生でも宜からうと諦めて、堪忍いたしますのさ、おや旦那、三圓、御辭退なしに戴きますよ、此後また何か御用でも御坐います節は、どうか御遠慮ならないで、年は取ッても今時の若いもンには旦那、まだ〳〵さう踏潰されて堪るもンですか、相手さへありやァ妾にでも出る氣で御坐いますよ、ハヽヽヽ』

流石の大浦卓三、あッと呆れて無言のまゝ暫時お虎婆の顏を見詰めぬ、

一碗の冷飯を爭ふ餓鬼道の諍、互に骨肉よりも深き味方となるは慾の皮の張合ふ瞬間、こゝに三圓といふ金を見れば、忽ち血眼を据ゑて不倶戴天の仇よりも怖ろしき敵となりぬ、されど今日いづこも同じ敵味方の離合集散、たゞ大小輕重あるばかりの事、お虎婆と喜助の世の中なり、

『御苦勞だッたな婆さン、不意に背後から抱止めてくれた工合は巧かッたよ、しかし幾何になッたね』

『たッた一圓さ、少くとも五圓を占めてやらうと思ッて隨分、骨を折ッたがね、なか〳〵あの肥ッてう奴、なるほど汝さンのいふ通りだ、迚も淺い藝ぢやァ、おッつく野郎でないよ』

『おい〳〵婆さン、ふざけちやァ困る、實ァ忍ンで、そッと立聞をしたぜ、三圓だらう』

『おや、油斷がならない、聞いて居たのかい、人が惡いね』

『どッちが悪いンだか、兎も角も三圓、出して貰はう』

『誰にさ』

『まア文句いはずに出すが宜いぢやアないかね、その上で一割にするよ』

『ぢやアお待ち、一枚だけ、ちよいと換へて來るから』

『なアに大丈夫、さう先取に換へなくッても間違は無いよ』

『だッて汝さンに出す一割の三十錢が今こゝにないからさ』

『ハ、、、その一割は此方から其方へ出すンだよ』

『あれ、戯談かと思やア本氣になッて、とンだ事を言出すよ喜助さン、この三圓は妾が貰ッたンだぜ、立聞したといへば猶更幸ひだ、彼奴には鐚一文も遣れないが婆さン汝には出すと、わざ〳〵本人から念を押されて受取ッた三圓だよ、其うち一割でも無理に殺いで渡すなアよく〳〵妾が好人物に生れたからさ、三十錢が嫌なら渡さないだけのこッた、不足がありや出直して本人に談判するが順當だ、いつでも閑暇だから相手になると言ッたよ、馬鹿々々しい考へて見なさい、一旦かうして自分の物になッた金を誰が分けてやりたいもンかね、恍け方も酷いよ喜助さン』

『なよ何だと、この業突張め、年齢に免じて聞直すンだぞ、も一度、いへるなら言ッて見ろ』

『人が變らないからね幾度、言ッても同じ口で同じ事だよ、妾が貰ッたから妾の三圓さ、一割が嫌なら出さないのさ、出すもンか』

『やい〳〵やい、その三圓は全體、どうして生れた三圓だ、うぬが口端で取れるなら何故、今まで取らねエンだ、この乃公が出るやうにして出した金だぞ、うぬア取次で受取ッたどけのこッた、さア二割にしてやるから』

『慾の深い、一割さへ引ッ込めたにさ、また二割にしろといふンかね』

『ぐづ〳〵面倒だから、うぬに二割くれてやるンだい』

『どの二割を貰へるの、この三圓は別物だよ』

『おい、婆さン、お虎婆ア』

『何だね』

『惡い事は言はねエ、おとなしく出した方が兩爲だ、一度や二度は老年に免じてもね、仕舞にやア癇癪の蟲といふ奴が承知しないから、六十六の婆を相手に仕ないとも限らないよ』

『さう心配せずと相手にして御覽よ、六十六の婆だから少々ばかり肉は落ちても骨は殘ッてるよ

お虎婆と七味唐辛子の喜助と、雙方より聲を潛めながら頻りに爭ふ體を、其まゝ聞捨にして差覗きもせず、ぶらりと暖を立出でし大浦卓三、かくと見るや否、長屋の出口に待受けし朝鮮髯、

『どちらへ、只今は、とンだ御迷惑で御坐いました、いえ實は驚いて、すぐ飛出した事は飛出しましたもンの偖あの七味屋といひ、お虎婆といひ、あゝいふ奴は外から人が這入ると却ッて事の大きくなる蒼蠅い奴で、あれがため、わざと差控へて居りましたが』

『ハ、、、なァに小さくッても大きくッても、あれだけの人間だよ』

『ところが彼奴等、どうした理由か頻りに爭ッてる樣子で御坐いますな』

『同じ穴の狸め、投與へた餌食の取合で爭ッてるンだよ、あはれなもンだね、今に嚙合を始めるよ、しかし、もう聞いて居ても見て居ても嫌な氣がして面白くないから、淺草邊まで

散歩に出かけるのさ、時に今夜ァ神易の御休業かね』

『休業では御坐いませンが、生憎と熊も西川も石作も長屋中、ふしぎに揃ッて誰も居りませンから、どうなるかと猶更心配いたしまして』

『そりやァ氣の毒だッた、ぢやァ今夜の分を引受けよう、平均に毎晩、何人ぐらゐづゝの客があるね』

『恐れ入ります、さやうな事を、いえ決して、恐れ入ります』

『さうでないよ、かりにも他の家業を妨げたンだからね、不足だらうが兎も角お馴染甲斐だ一圓に負けて貰はう、明日の朝あけるよ』

其まゝ飄然と立出でし宵闇の後姿、見えねど朝鮮髯おもはず伏拜ンで、雀躍しながら我塒へ飛込めば、折しも石作が歸りし體に此奴また飛出しぬ、

『石作さン今かね、宵の内に大變な面白い騒動があッたぜ』

『何だよ唐突に』

『委しい事は後で話すがね、ちよいと耳を立てゝ、そら、聞えるだらう、お虎婆と七味屋の喧嘩だ、いかにも取組が宜いぢやァないか』

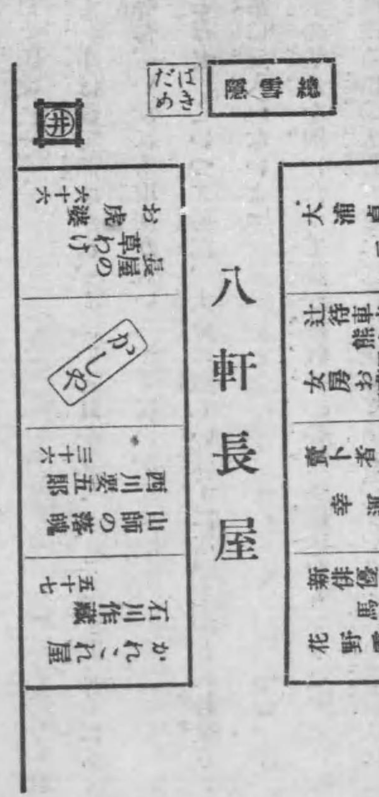
『なるほど、こいつァ妙だ、大分に激しい樣子だな、しかし八卦屋さン、うッかり彼奴等の仲裁に這入れないよ』

『狂犬の嚙合を別けたッて誰が彼奴等の仲間へ飛込むもンかね』

忽ち聞ゆる俄の大聲、どたばたと立騒ぐ物音、ぎやッと蛙の踏潰されしが如き聲、つゞいて長屋の外へ飛出せし跫音、其まゝ暫し寂然とせし中より熊公の女房が叫ぶ金切聲、

『お虎婆さンが殺されたよウ、七味屋が遁出したァ』

聞くや否、朝鮮髯と石作の兩人、おもはず互に抱付いて腰うち拔かしぬ、



熊公夫婦が其夜の物語、

『全體、どうしたンだい』

『どうしたッて良人さン、今でこそ呵しいやうだが、一時は大變な大騷動だッたよ、つまり宵の口に七味屋め、何だか急に怒り出してね、鄰屋の旦那へ喰ッて掛ッたところを、お虎婆が背後から抱止めたは宜いさ、しかし、それが狂言らしいンだよ、すると案の定、あの業突張が鄰屋へ入込ンでね、まざ〳〵と聞いて居れないやうな馬鹿々々しい追從輕薄を蒼蠅く並べ出したから、流石の旦那も閉口なすッたと見えて、幾何か呉れたのさ』

『太エ婆アだな、もし乃公が居りやア畜生、抓み出してやッたにさ、殘念な事を仕たよ』

『ところが良人さン、其お金でね、今度は味方同士の婆と七味屋の大喧嘩』

『ハヽヽヽよく出來てるよ、ハヽヽヽ』

『最初は口ばかりで、互に負けず劣らず毒の吐きッ競を仕て居た奴がね、いよ〳〵治まらな

いと見えて、どたばたと急に激しい取ッ組合の物音が聞え出したよ、なァに普通の人間なら妾だッて近處の義理で飛込むがね、あょいふ奴は後が面倒だと思ッてる最中に、ぎやッといふ妙な聲がしたから、おもはず驚いて出ようとする鼻頭を七味屋の遁出した工合、どうも尋常事でないのさ、おまけに追ッかけて出る筈の婆が良人さン、ひッそりとして音がないからね、そッと覗いて見ると大變、白髪を振亂して目を剝出して二三本の齒を嚙出したまンま横ッ倒しに斃れてるンだもの』

『どッか急所でも、ぶたれたンだな、そのくれェな事ァあッて宜い婆だ、それで今あの通り、うン〳〵と唸ッて寢込ンでゐるンだな』

『今だから急所でも打たれて一時、氣絕したもンと分るが、その時は良人さン、全く死ンだと思ッたからね』

『しかし長屋中、外に誰か居さうなもンぢやァねェか』

『ところが旦那は蒼蠅いと思ッたか、出て仕舞ッたし、まだ良人さンは歸らず西川さンも不在、あの馬の脚まで何處へ跳出して居ないのさ、たゞ石作と八卦よい屋は無事に居たンだがね、おもはず出した人殺といふ妾の聲に驚いて、抱合ッたまゝ二人とも腰が拔けたンだよ、ぶる〳〵震へて物も言へないンだもの、そのくせ良人さン、お虎婆の氣が付いたと聞くや否、ひよこ〳〵また動き出してね』

『ハ、、、、目に見るやうだ、道理で今、乃公が歸ッて來ると二人ながら妙な面ァ仕て、こそこそ這人つて仕舞ッたよ、もし腰でも拔かさ無きやァ第一番に飛出して騷ぐ奴だに、ハ、、ハ、しかし七味屋ァ眞實、遁げたンだな、いくら因業な婆でも六十六だから、しまッたと思ッて遁出したンだな』

『さうだよ、きッと打撲所が悪くッて死ンだもンと思ッたンだらうよ』

『彼奴等ア自業自得で、どうなッても宜いが、兎も角この長屋から死人を出さねエで幸福だ、さアこれで空屋が一軒また出來たよ、せめて今度ア人間らしい人間に住込ンで貰ひてエもンだな』

いつまで生きて居たくもないが、さて殺人犯もないと、へらず口を叩きしお虎婆、いよ〳〵平生の希望通り人殺しに逢ふべきところを、やう〳〵一時の氣絶に取止めながら、例の三圓を奪はれしのみか、ことし六十六の胸板を七味屋の脚に蹴飛されて、今朝まだ起きもえやらず、薄き煎餅蒲團たゞ一枚の上に身を横へつゝ、凧の遠音に等しく幽かに唸りぬ、折しも表障子を引開けて、ぬッと差覗きしは熊公、

『どうだい婆さン、前夜ア酷い目に出喰したさうだね』

『おや熊さン、定めて聞いたらうが、とンだ災難に逢ッたよ』

『まさか不意に出來た災難でもあるめエが、兎も角も唸ッてる工合ぢやア、どッか悪い急所を打たれたンだな、少しやア痛むかい』

『少しどころかね熊さン、痛まなくッてさ、氣絶したくらゐだもの、痩せても相手は野郎だよ、この胸の中央を畜生、口惜しくッてならない、もし萬一これか病源で此まゝ死ンだら、あの喜助め、どこに居たッて滿足に置く奴ぢやアない、きッと取殺してやる決心だ』

『おい〳〵婆さン、それが悪いンだ、もう汝、六十六だぜ、七十に四年だ、さう因業に執念深く人を恨むもンぢやアねエよ、考へて見るが宜い、七味唐辛子だッて、たゞ汝の胸板を蹴飛した理由でも無からうさ、野郎、よくないにしろ汝の方にも婆さン、また蹴られるだ

けの事があるンだらう、いくら痛くッても汝は一時の氣絶で生命ァ無事だ、しかし野郎は眞實、死ンだもンと思ッて逃出したンだから、今頃ァ青くなッて、びく〳〵してるよ、いはば五分々々だ』

『そりやァ熊さン、腑に落ちないよ、喧嘩ァ五分々々でも、此方に現在、みす〳〵取られたものがあるンだからね』

『ハヽヽヽまだ汝、そンな業突張を放れねエンだな、困ッたもンだよ、もし乃公の阿母でもありやァ、この四十面さげて男泣に泣くぜ、しかし有難く思ふが宜い、どうせ、さうだらうと言ッてね、おい婆さン、向ふの旦那から三圓また下さるンだ、乃公が賴まれて汝に渡す以上、少しやァ遠慮して唸り聲でも引ッ込めて貰ひてエ』

『だッて熊さン、こりやァ苦しいから自然に出るンだよ、わざ〳〵何も唸りたかァないさ、時に三圓、有難いね、そりやァ喜助の野郎に取られた三圓を下さるンだらうか』

『いち〳〵癪に觸るな、たゞ有難く默ッて頂戴しろい』

『ぢやァ熊さン、その三圓は喜助に取られた分として、もう二三圓、かうなッた手當に貰ッて欲しいもンだね、大きな聲では言はれないが、そッと一割ぐらひ酒料を出すよ』

熊公、今にも渡さンとせし三圓を其まゝ手に持ッて、おもはず大浦卓三の許へ振返りざま飛込みぬ、

『旦那、お止なせエ、あンな業突張に遣らなくッても、まだ世の中に人間の腐ッた奴ァ居ますよ』

わざ〳〵あの業突張に遣らずとも、まだ世の中に遣るべき人間の腐ッた奴はある筈と、其ま

ま三圓を大浦阜三の手に返して自己が塒へ立歸りたる熊公、されど流石に呆れて驚いて思はず腕を組始めぬ、

『あの婆ア、迚も凡人ぢアねエよ』

折しもお虎婆が頻りに唸る聲、ます〳〵高く、いよ〳〵激しく、果は今にも死するかと思ふばかりの苦し氣なる皺枯聲を張上げて、さも恨めし氣に叫び出しぬ、

『あゝ苦しい、胸が張裂けるやうだ、殘念だ、あゝ切ない、前夜の三圓は喜助の野郎に取られて、また今朝の三圓は熊さンに取られた、何故かう人に金を奪られるンだらう、あゝ殘念だ、あゝ苦しい、死ンでも忘れない』

大浦阜三は何とやら一種の鬼氣に迫らるゝ心地、果ては堪兼ねて壁越に私語きぬ、

『どうだね、あの聲は、いくら平氣でもさ、あゝ絶えず續けられちやア聞いて居られないよ、馬鹿〳〵しいこッたが、どうか遣ッて貰ひたいね、もう二三圓は出しても宜いよ』

熊公も面を皺めながら、そッと壁際の小聲に私語きぬ、

『旦那、どう仕ませう、實はね、あの婆ア、ふざけた眞似を仕やアがると思ひながら、やはり何だか妙に變な氣持がして堪りませンよ、あれ、あれですもの、わざと段々、聲を大きくして、いかにも苦しさうに恨めしさうに唸り出しますぜ旦那、まだ白書だから堪忍も出來ますがね、あゝいふ嫌な物凄い聲を寢靜ッた夜の夜半に耳の底へ傳へられちやア叶ひませンよ』

『だから今のうち、幾何か增して遣るのさ、しかし因業も慾の皮も、あれまで恥しらずに思ひきッて來ると、なか〳〵豪いもンだな、眞實、閉口だよ』

『全體、あの婆ア、何の生れ變りでせうね、おや、喜助ぢやアねエ、今度は旦那、わッしを

取殺すと吐しますぜ』

『ハ、、、兎も角も此方は人間の耳があるから、かうなりやア負けるよ、さア早く遣ッて貰ひたい』

『幾何、お遣りなさいます』

『五圓も遣らうか』

『勿體ねエが、ぢやアその五圓を、そッと枕頭へ抛込ンで遣りませうよ』

熊公、大浦卓三より受取りし五圓紙幣一枚を携へて、表障子の破れ目より聲もかけずに立寄りつゝ、そッと抛込めば、今の今まで叫びし悪口雑言は佇置、これのみはと思ひし苦しげの唸り聲さへ俄に消えて、はたりと止みぬ、

流石の大浦卓三も熊公も、お處婆には呆れて驚いて二の句も次けず、みす〳〵仕てやらるゝとは知りながら、五圓紙幣一枚そッと表障子の破れ目より抛込めば、今にも死ぬかと思はれし唸り聲、ぱたりと止ンで皺ッ面に微笑を浮べつゝ、ひよこ〳〵何處へか立出でし體にもはや首を捻ッて感心するの外なし、

『どうです旦那、あれでも不思議に人間の種をうけて生れた奴なンでせうか、隨分これまで長屋中に持餘された業突張ですがね、なアに乾ッからびた梅干婆と高を括ッて、この熊ばかりやア少しも驚かなエンですよ、しかし今日といふ今日こそ、いよ〳〵始めて驚きましたね、しみ〴〵何だか妙に怖くなりましたよ、わけて旦那のやうに取られる物のある方ア以後一切、うか〳〵相手になれませンぜ、あの樣子ぢやア可哀さうに七味唐辛子も一杯、喰ッたらしい鹽梅だ、考へて見ると一旦、うぬの懐中へ入れた金を死ンだッて殺されたッて